

全国高校野球選手権大会の教育学

古田 榮 作

1997年8月に行なわれた第79回全国高等学校野球選手権大会は14日間の全48試合で延べ観客数686,000人を集めた。関西地域ではTVでNHKと民間放送局の朝日放送と系列のUHF局が全試合の共同して完全実況中継を行い、ラジオ放送もNHKと民間放送局ではほぼ同様に完全実況中継を行っている。地方予選からトーナメント形式のロック・アウト方式で戦われることから「後がない」状況での緊迫した雰囲気の中で、シーソーゲームが展開され、また前評判の高い有力校が敗北するという「番狂わせ」が生まれ、悲喜こもごものドラマが演じられてきた。春に行われる全国高校野球選抜大会が地域大会・県大会・地方大会での試合結果をふまえての選考委員会による選考ということから、同一府県から複数の高校が選抜されることもあり、また「話題性」が加味され今年場合のように「日高高校 中津分校」が出場する機会を得たり、谷間の町の「池田高校」が初めて甲子園に足を踏み入れたのも春の「選抜大会」であった。高校野球の全国大会が機縁となって、「池田町サミット」や「分校サミット」が開催されるにいたっていることは社会現象としての「町起こし 村起こし」につながっている点も無視し得ない。

トーナメント方式、南北北海道と東西東京の4地区および府県を単位とする地区代表さらに全国中等学校野球選手権大会でもの49校が地区代表として、甲子園球場で覇を競うという現今の「全国高校野球選手権大会」になったのはこの大会が60回を迎えた1978年のことであった。府県を代表する各校が覇を競うこの大会が衆人の耳目を魅了するのは、ドラマチックな試合展開とともに忘れられがちな「郷土愛」に目覚めさせるという一種の「祭り」の現象をももっているからであろう。

本稿では、79回の歴史をもつこの「高校野球選手権大会」がどのような歩みをしてきたかを、主としてこの20年間の記録を中心に考察しようとするものである。

(1)

第二次世界大戦前では、参加校数も700校を上回ることもなく、1935年から1939年の間は参加校も減少している。数少ない参加校での地方大会はリーグ戦方式を取り（第1回大会の～第6回大会の東海大会、第3回大会と第4回大会の北陸大会）、また敗者復活戦

も採用されていた（第2回大会、第3回大会 第3回大会の優勝校の愛知一中は一回戦で負けたものの敗者復活戦を勝ち上がり優勝してしまった）。また代表校に決定してから病人が出たために出場を辞退するという事態も生じている（第8回大会の北陸代表の新潟商は棄権している）。

表1で明らかかなように、参加校の増加が著しいのは、戦前では1921年前後の時期と1931年前後の時期の二期であるが、戦後では敗戦直後と1964年前後1980年前後と1983年前後の四期なのである。おおまかに言って、戦前の参加校数の増加は学校数の増加と野球の普及に求められるが、戦後のそれは第一の時期では新学制の発足に伴う男女共学などの影響であり、地域制の波及がわが校も前身校の野球部と同様に野球部を作り、大会に参加しようというものでもあった。また1963年前後の第二期においてはベビーブーマーが高校に殺到する時期であり、学校数の増加がそのまま参加校の増加にあらわれたものといえよう。第三の時期と第四の時期は1976年から1985年にかけての長い増加傾向を示す時期の二つのピークであり、後に考察するようにその主たる原因は生徒数の減少傾向の中での大会への参加率の増大であり、ドーナツ化現象や生徒数の減少傾向への学校（特に私学）の教育方針・経営方針の変更によるものであると推測される。

ここで全国中等学校野球選手権大会の時期の代表校について一言しよう。表2は全国中等学校野球選手権大会およびその継承である全国高等学校野球選手権大会の代表校と優秀な成績をおさめた代表校の一覧である。米騒動のために選手権大会が中止された第四回大会と戦局の深刻化により文部次官通達によるスポーツの全国的な催しの禁止による5年間の中断が目につくし、第二に当時植民地であった朝鮮・台湾・満州の代表が参加していること（当然のことのように思われるが、第16回大会の大邱商、第17回大会で準優勝した嘉義農林を初めとして韓国人・台湾人・高砂族・日本人の混成チームであった。）、第三に非常に興味深いことは当時中等段階の教育機関に位置づけられていた師範学校が代表校となっていることである。（師範学校は小学校高等科終了後に入学することになっていたが、第9回大会出場の徽文高普は朝鮮人子弟のための教育機関である「高等普通学校」であるため、朝鮮人選手だけのチームであった。）四番目には府県単位で見るとき、代表校の座を占めることのできなかつた県があることである。埼玉県、滋賀県、宮崎県と沖縄県の4県は代表として甲子園に足を踏み入れることはできなかった。また戦時色が濃くなるに従って参加校が減少したことも見落とすことはできないであろう。（1932年には鳩山一郎文相によって「野球統制令」が出されている。）

「全国中等学校野球選手権大会」の時期においては参加校もせいぜい1125に留まっており、代表校も旧植民地代表校を含めて22校を数えるにすぎなかった。地方大会と呼ばれる予選においてはリーグ戦方式を採用できることもあったが、地方大会の改編の動きを一瞥してみると、第1回大会では①東北大会、②東京大会、③東海大会、④京津大会、

全国高校野球選手権大会の教育学

表1 参加校数の推移

回	年	参加校数	増減	備考 1	備考 2
1	1915	73			
2	1916	115	42		敗者復活戦有り
3	1917	118	3		敗者復活戦有り
4	1918	137	19	米騒動	米騒動で大会中止
5	1919	134	-3		
6	1920	157	23		
7	1921	207	50		
8	1922	229	22		
9	1923	243	14		
10	1924	263	20		甲子園球場完成
11	1925	302	39		JOKBが試合経過を放送
12	1926	337	35		
13	1927	389	52		JOKBが実況放送開始
14	1928	410	21		選手数14人以内
15	1929	465	55		
16	1930	541	76		
17	1931	634	93		
18	1932	660	26		文部省が「野球統制令」
19	1933	671	11		
20	1934	675	4		
21	1935	666	-9		
22	1936	665	-1		
23	1937	654	-11		
24	1938	633	-21		
25	1939	608	-25		
26	1940	617	9		
27	1941			戦局深刻化	地方大会開始後中止
	1942				
	1943				
	1944				
	1945			敗戦	
28	1946	745	128		
29	1947	1125	380		
30	1948	1256	131	新学制	
31	1949	1365	109		
32	1950	1536	171		
33	1951	1633	97		
34	1952	1653	20		民間放送初のラジオ実況開始
35	1953	1701	48		NHK TV放送開始
36	1954	1705	4		
37	1955	1721	16		
38	1956	1739	18		初ナイター
39	1957	1769	30		
40	1958	1807	38	記念大会	沖縄代表初参加

全国高校野球選手権大会の教育学

表1 参加校数の推移

回	年	参加校数	増減	備考 1	備考 2
41	1959	1864	57		
42	1960	1903	39		
43	1961	1941	38		
44	1962	1996	55		作新学院、春夏連覇
45	1963	2107	111	記念大会	
46	1964	2270	163		
47	1965	2363	93		
48	1966	2415	52	中京商、春夏連覇	
49	1967	2460	45		
50	1968	2485	25	記念大会	
51	1969	2523	38		箕島高校、春夏連覇
52	1970	2547	24		
53	1971	2569	22		
54	1972	2614	45		
55	1973	2660	46	記念大会	
56	1974	2709	49		金属バット使用
57	1975	2798	89		
58	1976	2893	95		
59	1977	2985	92		PL学園高校、春夏連覇
60	1978	3074	89	記念大会	選手15人以内
61	1979	3170	96		箕島高校、二度目の春夏連覇
62	1980	3270	100		
63	1981	3394	124		
64	1982	3466	72		
65	1983	3568	102	記念大会	
66	1984	3705	137		
67	1985	3791	86		
68	1986	3847	56		
69	1987	3900	53		
70	1988	3958	58	記念大会	
71	1989	3990	32		
72	1990	4027	37		
73	1991	4046	19		
74	1992	4059	13		
75	1993	4071	12	記念大会	
76	1994	4088	17		選手16人以内
77	1995	4098	10		
78	1996	4089	-9		
79	1997	4093	4		記録員ベンチ入り

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

回	年	優勝校	準優勝校	ベスト4-1	ベスト4-2	ベスト8-1
1	1915	京都二中	秋田中	早稲田実	和歌山中	神戸二中
2	1916	慶応普通	市岡中	鳥取中	和歌山中	一関中
3	1917	愛知一中	関西学院中	盛岡中	杵築中	長野師範
4	1918	大会中止	大会中止	大会中止	大会中止	大会中止
5	1919	神戸一中	長野師範	盛岡中	小倉中	市岡中
6	1920	関西学院中	慶応普通	鳥取中	松山商	明星商
7	1921	和歌山中	京都一商	大連商	豊国中	岡山一中
8	1922	和歌山中	神戸商	松本商	松山商	立命館中
9	1923	甲陽中	和歌山中	立命館中	松江中	早稲田実
10	1924	広島商	松本商	大連商	鳥取一中	宇都宮中
11	1925	高松商	早稲田実	大連商	第一神港	静岡中
12	1926	静岡中	大連商	高松中	和歌山中	新潟商
13	1927	高松商	広陵中	松本商	愛知商	平安中
14	1928	松本商	平安中	高松中	北海中	和歌山中
15	1929	広島商	海草中	鳥取一中	台北一中	静岡中
16	1930	広島商	諏訪蚕糸	和歌山中	平安中	大連商
17	1931	中京商	嘉義農林	小倉工	松山商	大社中
18	1932	中京商	松山商	明石中	熊本工	早稲田実
19	1933	中京商	平安中	松山中	明石中	郡山中
20	1934	呉港中	熊本工	市岡中	秋田中	京城商
21	1935	松山商	育英商	愛知商	早稲田実	嘉義農林
22	1936	岐阜商	平安中	育英商	桐生中	和歌山商
23	1937	中京商	熊本工	滝川中	海草中	呉港中
24	1938	平安中	岐阜商	甲陽中	高崎商	鳥取一中
25	1939	海草中	下関商	島田商	長野商	高松商
26	1940	海草中	島田商	市岡中	松本商	東邦商
27	1941	中止	中止	中止	中止	中止
	1942	中止	中止	中止	中止	中止
	1943	中止	中止	中止	中止	中止
	1944	中止	中止	中止	中止	中止
	1945	中止	中止	中止	中止	中止
28	1946	浪華商	京都二中	下関商	東高師付中	鹿児島商
29	1947	小倉中	岐阜商	成田中	仙台二中	志度中
30	1948	小倉	桐蔭	西京商	岐阜一	函館工
31	1949	湘南	岐阜	高松一	倉敷工	芦屋
32	1950	松山東	鳴門	済々黌	宇都宮工	米子東
33	1951	平安	熊谷	県和歌山商	高松一	大垣北
34	1952	芦屋	八尾	成田	長崎商	函館西
35	1953	松山商	土佐	明治	中京商	静岡商
36	1954	中京商	静岡商	新宮	高知商	北海
37	1955	四日市	坂出商	立命館	中京商	新宮
38	1956	平安	岐阜商	米子東	西条	中京商
39	1957	広島商	法政二	大宮	戸畑	県岐阜商
40	1958	柳井	徳島商	作新学院	高知商	魚津
41	1959	西条	宇都宮工	八尾	東北	天理
42	1960	法政二	静岡	鹿島	徳島商	早稲田実
43	1961	浪商	桐蔭	法政二	県岐阜商	中京商
44	1962	作新学院	久留米商	西条	中京商	北海
45	1963	明星	下関商	横浜	今治西	高田商
46	1964	高知	早稲	宮崎商	県岐阜商	熊谷商工
47	1965	三池工	銚子商	高鍋	秋田	東邦
48	1966	中京商	松山商	報徳学園	小倉工	平安
49	1967	習志野	広陵	中京	市和歌山商	富山商
50	1968	興国	静岡商	倉敷工	興南	広陵
51	1969	松山商	三沢	若狭	玉島商	富山北部
52	1970	東海大相模	PL学園	岐阜短大付	高松商	東邦

全国高校野球選手権大会の教育学

表 2 代表校・優秀成績校一覧

ベスト 8-2	ベスト 8-3	ベスト 8-4	備考 1	備考 2
山田中	鳥取中	高松中		
中学明善	香川商	広島商		敗者復活戦有り
明星商	慶応普通	京都一中		敗者復活戦有り
大会中止	大会中止	大会中止	米騒動	米騒動で大会中止
鳥取中	松山商	慶応普通		
長岡中	松山商	愛知一中		
松山商	釜山商	盛岡中		
北海中	広島商	島根商		
徽文高普	広陵中	函館商		
松山商	市岡中	第一神港		甲子園球場完成
長崎商	柳井中	敦賀商		JOKBが試合経過を放送
前橋中	京城中	鳥取一中		
鹿児島商	福岡中	早稲田実		JOKBが実況放送開始
愛知商	台北工	甲陽中		選手数14人以内
市岡中	平安中	高松商		
静岡中	松山商	東北中		
札幌商	桐生中	広陵中		
八尾中	石川師範	長野商		文部省が「野球統制令」
栃木中	横浜商	大正中		
高松中	敦賀商	海南中		
秋田商	呉港中	大分商		
北海中	千葉中	京阪商		
嘉義中	北海中	長野商		
下関商	京阪商	浅野中		
米子中	早稲田実	福岡工		
千葉商	京都商	日大三中		
中止	中止	中止	戦局深刻化	地方大会開始後中止
中止	中止	中止		
中止	中止	中止		
中止	中止	中止		
中止	中止	中止	敗戦	
松江中	函館中	松本市中		
高岡商	下関商	京都二商		
享栄商	関西	高知商	新学制	
松本市立	柳井	小倉北		
北海	若狭	呉阿賀		
敦賀	都島工	芦屋		
柳井商工	日大三	松山商		民間放送初のラジオ実況開始
御所実	浪華商	宇都宮工		NHKTV放送開始
三原	早稲田実	泉陽		
城東	日大三	津久見		
済々黌	浪華商	仙台二		初ナイター
早稲田実	上田松尾	坂出商		
高松商	平安	海南	記念大会	沖縄代表初参加
平安	日大二	高知商		
明石	大宮	北海		
報徳学園	崇徳	福岡		
日大三	県岐阜商	鹿児島商		作新学院、春夏連覇
九州学院	銚子商	桐生	記念大会	
平安	広陵	海南		
丸子実	津久見	報徳学園		
桐生	横浜一商	甲府工		中京商、春夏連覇
土佐	東奥義塾	大分商		
秋田市立	盛岡一	三重	記念大会	
静岡商	平安	仙台商		箕島高校、春夏連覇
滝川	熊谷商	大分商		

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	北海道	北北海道	南北海道	青森	岩手	秋田	山形
1915						秋田中	
1916					一関中		
1917					盛岡中		
1918					一関中		
1919					盛岡中		
1920	北海中				一関中		
1921	函館中				盛岡中		
1922	北海中					秋田中	
1923	函館中						
1924	北海中					秋田中	
1925	北海中					秋田商	
1926	旭川商			八戸中	盛岡中		
1927	札幌一中			青森師範	福岡中		
1928	北海中			八戸中	福岡中		
1929	北海中				福岡中	秋田師範	
1930	北海中			八戸中			
1931	札幌商				福岡中	秋田中	
1932	北海中				遠野中	秋田中	
1933	北海中				盛岡中	秋田中	
1934	札幌商					秋田中	
1935	北海中					秋田商	
1936	北海中				盛岡商		山形中
1937	北海中					秋田中	山形中
1938	北海中			青森師範			山形中
1939	札幌一中			青森中			山形中
1940	北海中				福岡中		
1941	中止			中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946	函館中				一関中		山形中
1947	函館工				福岡中		
1948	函館工			青森			
1949	帯広				盛岡		
1950	北海				盛岡		
1951	北海			青森			
1952	函館西				盛岡商		山形南
1953	北海					秋田	
1954	北海					秋田	
1955	芦別				岩手		新庄北
1956	北海					秋田	
1957	函館工				黒沢尻工		山形南
1958	札幌商			東奥義塾	福岡	秋田商	山形南 新庄北
1959		帯広三条	苫小牧東		宮古		新庄北
1960		旭川北	北海	青森		秋田商	
1961		釧路江南	札幌商		福岡	秋田商	
1962		帯広三条	北海	青森一			山形商
1963		釧路商	函館工	東奥義塾	花巻北	能代	日大山形
1964		旭川南	北海		花巻商	秋田工	
1965		帯広三条	北海	八戸		秋田	
1966		釧路江南	駒大苫小牧		花巻北	秋田	
1967		網走南ヶ丘	北海	東奥義塾	本荘		
1968		北日本学院	北海	三沢	盛岡一	秋田市立	日大山形
1969		芦別工	三笠	三沢		横手	
1970		北見柏陽	北海	五所川原農林		秋田商	

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	宮 城	福 島	茨 城	栃 木	群 馬	埼 玉	千 葉
1915							
1916							
1917							
1918			竜ヶ崎中				
1919			竜ヶ崎中				
1920			竜ヶ崎中				
1921			竜ヶ崎中				
1922			竜ヶ崎中				
1923	仙台中			宇都宮商			
1924				宇都宮中			
1925	仙台中				前橋中		
1926					前橋中		千葉師範
1927			茨城商		桐生中		
1928					前橋中		関東中
1929			水戸中		前橋商		
1930	東北中		水戸中		桐生中		
1931					桐生中		千葉中
1932				高崎商		千葉中	
1933			水戸商	栃木中			
1934		福島師範			桐生中		関東中
1935		福島師範			桐生中		千葉中
1936					桐生中		千葉中
1937					高崎商		
1938					高崎商		
1939					桐生中		千葉商
1940	仙台中				高崎商		千葉商
1941	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946					桐生工		成田中
1947	仙台中				桐生中		成田中
1948	石巻				前橋		成田
1949	東北		水戸商			熊谷	
1950	仙台一			宇都宮工			千葉一
1951		福島商			桐生	熊谷	
1952			水戸商				成田
1953	白石			宇都宮工			千葉一
1954		福島商	水戸一				千葉商
1955					桐生		成田
1956	仙台二			足利工			千葉商
1957			土浦一			大宮	
1958	東北	福島商	水戸商	作新学院	桐生	大宮	銚子商
1959	東北		下館一	宇都宮工		川越	
1960	東北		水戸商		桐生工	大宮	
1961	東北			宇都宮学園			銚子商
1962	気仙沼			作新学院			習志野
1963	仙台育英	磐城	水戸工	足利工	桐生	大宮	銚子商
1964	仙台育英			作新学院		熊谷商工	千葉商
1965		保原		鹿沼農商		熊谷商工	銚子商
1966		福島商	竜ヶ崎一		桐生		
1967	仙台商			鹿沼農商		大宮	習志野
1968	東北	磐城	取手一	小山	前橋工	大宮工	千葉商
1969	仙台商		取手一	宇都宮学園		川越工	
1970		磐城			高崎商	熊谷商	銚子商

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	東 京	東 東 京	西 東 京	神 奈 川	新 潟	長 野	山 梨
1915	早稲田実						
1916	慶応普通					長野師範	
1917	慶応普通					長野師範	
1918	慶応普通				長岡中	長野師範	
1919	慶応普通				長岡中	長野師範	
1920	慶応普通				長岡中	松本商	
1921	慶応普通				長岡中	長野中	
1922	早稲田実				新潟商	松本商	
1923	早稲田実			横浜商	新潟商		
1924	早稲田実					松本商	
1925	早稲田実					長野商	
1926	早稲田実				新潟商		
1927	早稲田実					松本商	
1928	早稲田実			神奈川商工		松本商	
1929	慶応商工					諏訪蚕糸	
1930	慶応普通					諏訪蚕糸	
1931	早稲田実			神奈川商工		長野商	
1932	早稲田実					長野商	
1933	慶応商工			横浜商		松本商	
1934	早稲田実					長野商	
1935	早稲田実					飯田商	甲府中
1936	早稲田実					長野商	
1937	慶応商工			浅野中		長野商	
1938	日大三中			浅野中		松本商	
1939	早稲田実					長野商	
1940	日大三中					松本商	
1941	中止			中止	中止	中止	中止
1942	中止			中止	中止	中止	中止
1943	中止			中止	中止	中止	中止
1944	中止			中止	中止	中止	中止
1945	中止			中止	中止	中止	中止
1946	東京高師附					松本市中	
1947	慶応商工					松本県中	谷村工商
1948	慶応			浅野学園		穂高農	
1949	慶応			湘南		松本市立	
1950	明治			神奈川商工		松商学園	
1951	早稲田実			希望丘		松商学園	
1952	日大三			法政二		松商学園	都留
1953	明治			慶応		松商学園	
1954	早稲田実			鶴見工		松商学園	
1955	日大三			法政二		伊那北	
1956	早稲田実			慶応		伊那北	
1957	早稲田実			法政二		上田松尾	
1958	明治			法政二	新潟商	松商学園	甲府商
1959	日大二			法政二		松商学園	
1960	早稲田実			法政二		赤穂	
1961	法政一			法政二	新発田農	伊那北	甲府一
1962	日大三			慶応		長野	甲府工
1963	日大一			横浜	新潟商	松商学園	甲府商
1964	修徳			武相		松商学園	
1965	日大二			武相		丸子実	
1966	修徳			横浜一商	小千谷	塚原	甲府工
1967	堀越			武相		松商学園	
1968	日大一			武相	新潟商	岡谷工	甲府一
1969	日大一			東海大相模		松商学園	
1970	日大一			東海大相模	長岡商	須坂園芸	

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	静 岡	愛 知	岐 阜	三 重	富 山	石 川	福 井
1915				山田中			
1916		愛知四中					
1917		愛知一中					
1918		愛知一中					
1919		愛知一中					
1920		愛知一中					
1921		明倫中					
1922		名古屋商					
1923		愛知一中				金沢商	
1924	静岡中	愛知一中				金沢一中	
1925	静岡中	愛知一中					敦賀商
1926	静岡中	愛知商					敦賀商
1927	静岡中	愛知商					敦賀商
1928		愛知商					敦賀商
1929	静岡中	愛知一中					敦賀商
1930	静岡中	愛知商					敦賀商
1931		中京商					敦賀商
1932	静岡中	中京商				石川師範	
1933		中京商					敦賀商
1934	島田商	享栄商					敦賀商
1935		愛知商				石川工	
1936	静岡商		岐阜商				福井商
1937	島田商	中京商			高岡商		
1938	掛川中		岐阜商				敦賀商
1939	島田商	東邦商			高岡商		
1940	島田商	東邦商			富山商		
1941	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946	沼津中	愛知商					敦賀商
1947			岐阜商		高岡商		
1948	静岡一	享栄商	岐阜一			金沢一	
1949	静岡城内	瑞陵	岐阜				武生
1950	浜松商	瑞陵	長良				若狭
1951	静岡城内	豊橋商	大垣北				敦賀
1952		愛知	岐阜工				敦賀
1953	静岡商	中京商		津		金沢泉丘	
1954	静岡商	中京商	岐阜				武生
1955	静岡	中京商		四日市			若狭
1956	静岡	中京商	県岐阜商		滑川		
1957	清水東	津島商工	県岐阜商				三国
1958	清水東	中京商	多治見工	松阪商	魚津	金沢桜丘	敦賀
1959	静岡商	中京商		松坂商	魚津		若狭
1960	静岡	享栄商	県岐阜商		高岡商	金沢市工	
1961	浜松商	中京商	県岐阜商				武生
1962	静岡市立	中京商	県岐阜商		高岡商	金沢	
1963	静岡	中京商	大垣商	相可	富山商	金沢泉丘	若狭
1964	掛川西	大府	県岐阜商		富山商	小松実	
1965	東海大一	東邦		海星	水見		武生
1966	静岡商	中京商		三重		金沢商	
1967	浜松商	中京		四日市	富山商		若狭
1968	静岡商	享栄	岐阜南	三重	高岡商	金沢桜丘	若狭
1969	静岡商	東邦		三重	富山北部		若狭
1970	静岡	東邦	岐阜短大附			金沢桜丘	

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	岡山
1915		京都二中		神戸二中		和歌山中	
1916		京都二中	市岡中	関西学院中		和歌山中	
1917		京都一中	明星商	関西学院中		和歌山中	
1918		京都二中	市岡中	関西学院中		和歌山中	
1919		同志社中	市岡中	神戸一中		和歌山中	
1920		京都一商	明星商	関西学院中		和歌山中	
1921		京都一商	市岡中	神戸一中		和歌山中	岡山一中
1922		立命館中	市岡中	神戸商		和歌山中	
1923		立命館中	明星商	甲陽中		和歌山中	
1924		同志社中	市岡中	第一神港		和歌山中	
1925		東山中	市岡中	第一神港		和歌山中	
1926		東山中	浪華商	第一神港		和歌山中	
1927		平安中	北野中	第一神港		和歌山中	
1928		平安中	豊中中商	甲陽中		和歌山中	
1929		平安中	市岡中	関西学院中		海草中	
1930		平安中	浪華商	甲陽中		和歌山中	
1931		平安中	八尾中	第一神港		和歌山商	
1932		京都師範	八尾中	明石中		和歌山中	
1933		平安中	浪華商	明石中	郡山中		
1934		京都商	市岡中	神戸一中		海草中	
1935		平安中	日新商	育英商		海草中	
1936		平安中	京阪商	育英商		和歌山商	
1937		平安中	浪華商	滝川中		海草中	
1938		平安中	京阪商	甲陽中		海草中	
1939		京都商	京阪商	関西学院中		海草中	
1940		京都商	市岡中	北神商		海草中	
1941	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946		京都二中	浪華商	芦屋中		和歌山中	
1947		京都二商	浪華商	神戸一中		海草中	
1948		西京商	天王寺	芦屋		桐蔭	関西
1949		平安	高津	芦屋		海南	倉敷工
1950		山城	泉大津	明石		新宮	
1951		平安	都島工	芦屋		県和歌山商	岡山東
1952		山城	八尾	芦屋		新宮	
1953	八日市		浪華商	芦屋	御所実		
1954		平安	泉陽	滝川		新宮	
1955		立命館	浪華商	市神戸商		新宮	玉島
1956		平安	浪華商	県尼崎		新宮	
1957		平安	寝屋川	育英		県和歌山商	
1958	甲賀	平安	浪華商	姫路南	御所工	海南	倉敷商
1959		平安	八尾	滝川	天理		倉敷工
1960		平安	浪商	明石	御所工		
1961		山城	浪商	報徳学園		桐蔭	倉敷工
1962		平安	P L学園	滝川	天理		倉敷工
1963	長浜北	京都商	明星	市西宮	高田商	南部	岡山東商
1964		平安	明星	滝川		海南	
1965		京都商	大鉄	報徳学園	天理		岡山東商
1966		平安	北陽	報徳学園	郡山		岡山東商
1967	守山		明星	報徳学園		市和歌山商	倉敷工
1968	伊香	平安	興国	市神港	智弁学園	星林	倉敷工
1969		平安	明星	東洋大姫路	御所工		玉島商
1970		平安	P L学園	滝川		箕島	岡山東商

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	広島	鳥取	島根	山口	香川	徳島	愛媛
1915	広島中	鳥取中			高松中		
1916	広島商	鳥取中			香川商		
1917	広島商		杵築中		香川商		
1918	広島商	鳥取中					今治中
1919		鳥取中		豊浦中			松山商
1920		鳥取中		鴻城中			松山商
1921			杵築中				松山商
1922	広島商		島根商				松山商
1923	広陵中		松江中				松山商
1924	広島商	鳥取一中					松山商
1925		米子中		柳井中	高松商		
1926		鳥取一中		柳井中	高松中		
1927	広陵中	鳥取一中			高松商		
1928	広陵中	鳥取一中			高松中		
1929	広島商	鳥取一中			高松商		
1930	広島商	米子中					松山商
1931	広陵中		大社中				松山商
1932	大正中	米子中					松山商
1933	大正中	鳥取一中					松山中
1934	呉港中	鳥取一中			高松中		
1935	呉港中	米子中					松山商
1936	呉港中	鳥取一中					松山商
1937	呉港中		大田中			徳島商	
1938		鳥取一中		下関商			坂出商
1939		米子中		下関商			高松商
1940			松江商	下関商		徳島商	
1941	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946			松江中	下関商			
1947		鳥取一中		下関商	志度商		
1948				柳井	丸亀		
1949				柳井	高松一	城東	
1950	呉阿賀	米子東				鳴門	松山東
1951				下関西	高松一		
1952		境		柳井商工		鳴門	松山商
1953		鳥取西		下関東			松山商
1954	三原	米子東			高松商		
1955				岩国工	坂出商		
1956	広島商	米子東				徳島商	西条
1957	広島商		松江商		坂出商		
1958	尾道商	鳥取西	益田産	柳井	高松商	徳島商	八幡浜
1959	広陵		大田				西条
1960	盈進商	米子東	大社			徳島商	西条
1961	崇徳		大社				松山商
1962	広陵			鴻城		徳島商	西条
1963	広陵	米子南	大社	下関商	丸亀商	徳島商	今治西
1964	広陵	米子南		早鞆			今治南
1965	広陵			小野田工	高松商	徳島商	
1966	広島商			早鞆		鳴門	松山商
1967	広陵			早鞆			今治南
1968	広陵	米子南	浜田	岩国商	高松商	鴨島商	松山商
1969	広陵			宇部商			松山商
1970	広島商		江津工		高松商		

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎
1915		久留米商					
1916		中学明善					
1917				長崎中			
1918		中学明善					
1919	小倉中						
1920		豊国中					
1921		豊国中					
1922			佐賀中				
1923			佐賀中				
1924			佐賀中				
1925				長崎商	熊本商		
1926				長崎商	熊本商		
1927			佐賀中				
1928			佐賀中				
1929			佐賀中				
1930		小倉工					
1931		小倉工				大分商	
1932		小倉工			熊本工		
1933			佐賀師範			大分商	
1934		小倉工			熊本工		
1935			佐賀商			大分商	
1936		小倉工					
1937		福岡工			熊本工		
1938		福岡工				大分商	
1939		福岡工			熊本工		
1940		福岡工				大分商	
1941	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止	中止	中止
1946	城東中	小倉中					
1947		小倉中				臼杵中	
1948	高知商	小倉	鹿島一			大分二	
1949		小倉北		長崎東		臼杵	
1950		小倉			済々饗	別府一	
1951	高知商	小倉		長崎西		大分城崎	
1952		三池		長崎商		津久見	
1953	土佐	東筑			熊本		
1954	高知商	小倉		長崎商			高鍋
1955	城東	小倉			熊本	津久見	
1956		小倉			済々饗	別府鶴見丘	
1957	高知	戸畑	佐賀商				大宮
1958	高知商	八女	佐賀	南山	済々饗	大分上野丘	大淀
1959	高知商	戸畑		海星	鎮西		高鍋
1960		戸畑	鹿島		熊本商		大淀
1961	高知商	戸畑		海星			高鍋
1962		久留米商	佐賀商				
1963	高知	柳川商	武雄	海星	九州学院	津久見	宮崎商
1964	高知	小倉工		海星	八代東		宮崎商
1965		三池工	佐賀商			津久見	高鍋
1966		小倉工		海星		津久見	
1967	土佐	小倉工		海星		大分商	大宮
1968	高知	飯塚商		海星	鎮西	津久見	延岡商
1969	高知商	飯塚商		長崎商		大分商	宮崎商
1970	高知商	九州工	唐津商			大分商	都城

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	鹿児島	沖縄	旧朝鮮	旧台湾	旧満州
1915					
1916					
1917					
1918					
1919					
1920					
1921			釜山商		大連商
1922			京城中		南満工
1923			徽文高普	台北一中	大連商
1924			京城中	台北商	大連商
1925			釜山中	台北工	大連商
1926			京城中	台北商	大連商
1927	鹿児島商		京城中	台北商	大連商
1928	鹿児島商		京城中	台北工	大連商
1929	鹿児島商		平壤中	台北一中	青島中
1930	鹿児島二中		大邱商	台北一中	大連商
1931			京城商	嘉義農林	大連商
1932			平壤中	台北工	大連商
1933			善隣商	嘉義農林	大連商
1934			京城商	台北商	大連商
1935			新義州商	嘉義農林	青島中
1936	鹿児島商		仁川商	嘉義農林	青島中
1937			竜山中	嘉義中	青島中
1938			仁川商	台北一中	天津商
1939			仁川商	嘉義中	天津商
1940			平壤二中	台北一中	奉天中
1941	中止	中止	中止	中止	中止
1942	中止	中止	中止	中止	中止
1943	中止	中止	中止	中止	中止
1944	中止	中止	中止	中止	中止
1945	中止	中止	中止	中止	中止
1946	鹿児島商				
1947					
1948					
1949					
1950					
1951					
1952					
1953	甲南				
1954					
1955					
1956					
1957					
1958	玉龍	首里			
1959					
1960	出水商				
1961	鹿児島実				
1962	鹿児島商	沖縄			
1963	鹿児島	首里			
1964	玉龍				
1965	玉龍				
1966	鹿児島実	興南			
1967	鹿児島				
1968	鹿児島商	興南			
1969	鹿児島商				
1970	鹿児島商工				

表2 代表校・優秀成績校一覧

回	年	優勝校	準優勝校	ベスト4-1	ベスト4-2	ベスト8-1
53	1971	桐蔭学園	磐城	郡山(奈良)	岡山東商	静岡学園
54	1972	津久見	柳井	天理	高知商	明星
55	1973	広島商	静岡	川越工	今治西	銚子商
56	1974	銚子商	防府商	鹿児島実	前橋工	東海大相模
57	1975	習志野	新居浜商	上尾	広島商	天理
58	1976	桜美林	PL学園	海星(長崎)	星稜	中京
59	1977	東洋大姫路	東邦	大鉄	今治西	熊本工
60	1978	PL学園	高知商	中京	岡山東商	報徳学園
61	1979	箕島	池田	浪商	横浜商	高知
62	1980	横浜	早稲田実	天理	瀬田工	興南
63	1981	報徳学園	京都商	鎮西	名古屋電気	都城商
64	1982	池田	広島商	中京	東洋大姫路	早稲田実
65	1983	PL学園	横浜商	久留米商	池田	岐阜第一
66	1984	取手二	PL学園	鎮西	金足農	岡山南
67	1985	PL学園	宇部商工	東海大甲府	甲西	関東一
68	1986	天理	松山商	浦和学院	鹿児島商	佐伯鶴城
69	1987	PL学園	常総学院	帝京	東亜学園	習志野
70	1988	広島商	福岡第一	浦和市立	沖縄水産	宇部商
71	1989	帝京	仙台育英	秋田経法大付	尽誠学園	上宮
72	1990	天理	沖縄水産	西日本短大付	山陽	丸亀
73	1991	大阪桐蔭	沖縄水産	星稜	鹿児島実	柳川
74	1992	西日本短大付	拓大紅陵	東邦	尽誠学園	天理
75	1993	育英	春日部共栄	市立船橋	常総学院	修徳
76	1994	佐賀商	樟南	作久	柳ヶ浦	北海
77	1995	帝京	星陵	敦賀気比	智弁学園	創価
78	1996	松山商	熊本工	福井商	前橋工	高陽東
79	1997	智弁和歌山	平安	浦添商	前橋工	佐野日大付

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

ベスト8-2	ベスト8-3	ベスト8-4	備考1	備考2
銚子商	玉龍	県岐阜商		
東海大工	中京	高松一		
北陽	富山商	高知商	記念大会	
郡山(奈良)	静岡商	平安		金属バット使用
東海大相模	磐城	中京商		
東北	豊見城	銚子商		
高知	豊見城	早稲田実		PL学園高校、春夏連覇
天理	豊見城	県岐阜商	記念大会	選手15人以内
比叡山	大分商	城西		箕島高校、二度目の春夏連覇
浜松商	広陵	箕島		
和歌山工	今治西	志度商		
熊本工	比叡山	津久見		
宇部商	中京	高知商	記念大会	
鹿児島商工	新潟南	松山商		
鹿児島商工	東北	高知商		
東海大姫路	沖縄水産	高知商		
関西	北嵯峨	中京		
津久見	江の川	浜松商	記念大会	
倉敷商	福岡大大濠	海星(三重)		
鹿児島実	日大鶴ヶ丘	横浜商		
佐賀学園	帝京	松商学園		
北陵	広島工	池田		
京都西	小林西	徳島商	記念大会	
水戸商	仙台育英	長崎北陽台		選手16人以内
旭川実	PL学園	金足農		
海星(三重)	波佐見	鹿児島実		
市立船橋	徳島商	敦賀気比		記録員ベンチ入り

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	北海道	北海	北海道	青森	岩手	秋田	山形
1971		留萌	北海		花巻北	秋田市立	
1972		北見工	苫小牧工		宮古水産	秋田市立	
1973		旭川竜谷		青森商	盛岡三	秋田	日大山形
1974		旭川竜谷	函館有斗		一関商工	秋田市立	山形南
1975		旭川竜谷	北海道日大		盛岡商	秋田商	
1976		釧路江南	東海大四		花北商	秋田商	日大山形
1977		釧路江南	札幌商		黒沢尻工	熊代	酒田工
1978		旭川竜谷	東海大四	青森北	盛岡一	能代	鶴商学園
1979		釧路工	札幌商	弘前実	久慈	秋田商	日大山形
1980		旭川大	札幌商	弘前工	福岡	秋田商	山形南
1981		帯広工	函館有斗	東奥義塾	盛岡工	秋田経法大附	鶴商学園
1982		帯広農	函館有斗	木造	盛岡工	秋田経法大附	東海大山形
1983		旭川竜谷	駒大岩見沢	八戸工大一	黒沢尻工	秋田	日大山形
1984		広尾		弘前実	大船渡	金足農	日大山形
1985		旭川竜谷	函館有斗	八戸	福岡	能代商	東海大山形
1986		帯広三条	東海大四	三沢商	一関商工	秋田工	東海大山形
1987		帯広北	函館有斗	八戸工大一	一関商工	秋田経法大附	東海大山形
1988		滝川西	札幌開成	弘前工	高田	本荘	日大山形
1989		帯広北	北海	弘前工	盛岡三	秋田経法大附	東海大山形
1990		中標津	函館大有斗	八戸工大一	花巻東	秋田経法大附	日大山形
1991		旭川工	北照	弘前実	専大北上	秋田	米沢工
1992		旭川北	北海	弘前実	一関商工	能代	日大山形
1993		旭川大	東海大四	青森山田	久慈商	秋田経法大附	日大山形
1994		旭川北	北海	八戸	盛岡四	秋田	鶴岡工
1995		旭川実	北海工	青森山田	盛岡大附	金足農	東海大山形
1996		旭川工	北海	弘前実	盛岡大付	秋田経法大付	日大山形
1997		旭川大	函館大有斗	光星学院	専大北上	秋田商	酒田南

年	宮城	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉
1971		磐城			高崎商	熊谷商	銚子商
1972	東北			足利工			習志野
1973	仙台育英	双葉	取手一	作新学院	前橋工	川越工	銚子商
1974		福島商	土浦日大		前橋工	上尾	銚子商
1975	仙台育英	磐城	竜ヶ崎一	足利学園		上尾	習志野
1976	東北	学法石川	銚田一	小山		所沢商	銚子商
1977	仙台育英	福島商	取手二	宇都宮学園	高崎商	川口工	千葉商
1978	仙台育英	郡山北工	取手二	作新学院	桐生	所沢商	我孫子
1979	東北	安積商	明野	足利学園	前橋工	上尾	市銚子
1980	東北	双葉	江戸川学園	黒磯	前橋工	熊谷商	習志野
1981	仙台育英	福島商	取手二	宇都宮学園	前橋工	熊谷商	銚子西
1982	東北	安積商	銚田一	足利工	東農大二	熊谷	東海大浦安
1983	仙台商	学法石川	茨城東	宇都宮南	太田工	所沢商	印旛
1984	東北	学法石川	取手二	足利工	高崎商	上尾	拓大紅陵
1985	東北	磐城	日立一	国学院栃木	東農大二	立教	銚子商
1986	仙台育英	学法石川	土浦日大	宇都宮工	前橋商	浦和学院	拓大紅陵
1987	東北	日大東北	常総学院	足利工	中央	浦和学院	習志野
1988	東陵	学法石川	常総学院	宇都宮学園	高崎商	浦和市立	拓大紅陵
1989	仙台育英	学法石川	常総学院	佐野日大	東農大二	川越商	成東
1990	仙台育英	日大東北	竜ヶ崎一	葛生	高崎商	大宮東	成田
1991	東北	学法石川	竜ヶ崎一	宇都宮学園	樹徳	春日部共栄	我孫子
1992	仙台育英	郡山	常総学院	宇都宮南	樹徳	秀明	拓大紅陵
1993	東北	学法石川	常総学院	佐野日大	桐生第一	春日部共栄	市船橋
1994	仙台育英	双葉	水戸商	小山	東農大二	浦和学院	志学館
1995	仙台育英	磐城	水戸商	宇都宮学園	桐生第一	越谷西	銚子商
1996	仙台育英	日大東北	水戸短大付	宇都宮南	前橋工	浦和学院	市立船橋
1997	仙台育英	日大東北	茨城東	佐野日大	前橋工	春日部共栄	市立船橋

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	東 京	東 東 京	西 東 京	神 奈 川	新 潟	長 野	山 梨
1971	日大一			桐蔭学園		須坂商	
1972	日大桜丘			東海大相模	糸魚川商工	丸子実	峡南
1973	日大一			藤沢商	糸魚川商工	丸子実	甲府工
1974		城西	佼成学園	東海大相模	長岡商	野沢北	
1975		早稲田実	堀越	東海大相模	新潟商	松商学園	巨摩
1976	日体大荏原	桜美林	東海大相模	高田商	松商学園	塩山商	
1977		早稲田実	桜美林	東海大相模	長岡	松商学園	
1978		早稲田実	日大二	横浜	中越	松商学園	日川
1979		城西	日大三	横浜商	長岡	松商学園	吉田
1980		早稲田実	国立	横浜	中越	松商学園	日川
1981		早稲田実	国学院久我山	横浜	長岡	岡谷工	東海大甲府
1982		早稲田実	日大二	法政二	新発田農	丸子実	東海大甲府
1983		帝京	創価	横浜商	新発田農	長野商	吉田
1984		日大一	法政一	桐蔭学園	新潟工	篠ノ井	東海大甲府
1985		関東一	日大三	藤嶺藤沢	中越	丸子実	東海大甲府
1986		正則学園	東亜学園	横浜商	新潟南	松商学園	東海大甲府
1987		帝京	東亜学園	横浜商	中越	上田	東海大甲府
1988		日大一	堀越	法政二	中越	上田東	東海大甲府
1989		帝京	東亜学園	横浜	新発田農	丸子実	吉田
1990		関東一	日大鶴ヶ丘	横浜商	中越	丸子実	甲府工
1991		帝京	国学院久我山	桐蔭学園	新潟南	松商学園	市川
1992		帝京	創価	桐蔭学園	高田工	松商学園	東海大甲府
1993		修徳	堀越	横浜商大	新潟明訓	松商学園	甲府工
1994		関東一	創価	横浜	中越	佐久	市川
1995		帝京	創価	日大藤沢	六日町	佐久長聖	山梨学院大附
1996	早稲田実	東海大菅生	横浜	中越	東海大三	山梨学院大付	
1997		岩倉	堀越	桐蔭学園	日本文理	松商学園	甲府工

年	静 岡	愛 知	岐 阜	三 重	富 山	石 川	福 井
1971	静岡学園	東邦	県岐阜商		高岡商		美方
1972	東海大工	中京		海星		星陵	
1973	静岡	東邦	中京商	三重	富山商	金沢市工	福井商
1974	静岡商	名古屋電工	中京商		高岡商		三国
1975	浜松商	国府	中京商	三重		金沢桜丘	三国
1976	東海大一	中京	市岐阜商	三重		星陵	福井
1977	掛川西	東邦	土岐商	海星		星陵	福井商
1978	静岡	中京	県岐阜商	宇治山田商	石動	金沢	福井商
1979	富士	中京	県岐阜商	相加	桜井	星陵	敦賀
1980	浜松商	大府	美濃加茂	明野	新湊	金沢	敦賀
1981	浜松西	名古屋電工	岐阜南	海星	高岡第一	星陵	福井商
1982	静岡	中京	県岐阜商	明野	高岡商	星陵	福井
1983	東海大一	中京	岐阜第一	相加	桜井	小松明峰	北陸
1984	浜松商	享栄	県岐阜商	明野	高岡商	星陵	福井商
1985	東海大工	東邦	県岐阜商	海星	高岡商	北陸大谷	福井
1986	清水市商	享栄	県岐阜商	明野	新湊	小松	福井商
1987	静岡	中京	県岐阜商	明野	高岡商	金沢	福井商
1988	浜松商	愛工大名電	大垣工	伊勢工	富山商	金沢	福井商
1989	日大三島	東邦	県岐阜商	海星	富山商	星陵	福井商
1990	浜松商	愛工大名電	美濃加茂	海星	桜井	星陵	大野
1991	市沼津	東邦	市岐阜商	四日市工	富山商	星陵	福井
1992	桐陽	東邦	県岐阜商	三重	高岡商	星陵	北陸
1993	掛川西	享栄	東濃実	海星	不二越工	金沢	福井商
1994	浜松西	愛知	大垣商	海星	富山商	星陵	敦賀気比
1995	韭山	享栄	県岐阜商	三重	高岡商	星陵	敦賀気比
1996	常葉菊川	愛産大三河	県岐阜商	海星	富山商	金沢	福井商
1997	浜松工	豊田大谷	県岐阜商	桑名西	新湊	金沢	敦賀気比

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	滋 賀	京 都	大 阪	兵 庫	奈 良	和 歌 山	岡 山
1971	比叡山		PL学園	報徳学園	郡山		岡山東商
1972	膳所		明星	東洋大姫路	天理		
1973	伊香	京都商	北陽	東洋大姫路	天理	箕島	岡山東商
1974		平安	PL学園	東洋大姫路	郡山		玉島商
1975		桂	興国	洲本	天理		岡山東商
1976		京都商	PL学園	市神港	天理		岡山東商
1977		京都商	大鉄	東洋大姫路	智弁学園		水島工
1978	膳所	京都商	PL学園	報徳学園	天理	箕島	岡山東商
1979	比叡山	宇治	浪商	明石南	天理	箕島	倉敷商
1980	瀬田工	東宇治	北陽	滝川	天理	箕島	岡山理大附
1981	近江	京都商	北陽	報徳学園	智弁学園	和歌山工	岡山南
1982	比叡山	宇治	春日丘	東洋大姫路	智弁学園	南部	関西
1983	比叡山	東山	PL学園	市尼崎	天理	箕島	岡山南
1984	長浜	京都西	PL学園	明石	智弁学園	箕島	岡山南
1985	甲西	花園	PL学園	東洋大姫路	智弁学園	和歌山工	岡山南
1986	甲西	京都商	泉州	東洋大姫路	天理	桐蔭	倉敷工
1987	伊香	北嵯峨	PL学園	明石	天理	智弁和歌山	関西
1988	八幡商	京都西	近大附	滝川二	天理	高野山	倉敷商
1989	八幡商	京都西	上宮	神戸弘陵	智弁学園	智弁和歌山	倉敷商
1990	八幡商	平安	渋谷	育英	天理	星林	岡山城東
1991	八幡商	北嵯峨	大阪桐蔭	村野工	天理	智弁和歌山	岡山東商
1992	近江	京都西	近大附	神港学園	天理	智弁和歌山	倉敷商
1993	近江兄弟社	京都西	近大附	育英	郡山	智弁和歌山	岡山南
1994	近江	西城陽	北陽	姫路工	天理	市和歌山商	関西
1995	比叡山	京都成章	PL学園	尼崎北	智弁学園	田辺	関西
1996	近江	北嵯峨	PL学園	神港学園	天理	智弁和歌山	倉敷工
1997	比叡山	平安	履正社	報徳学園	智弁学園	智弁和歌山	倉敷商

年	広 島	鳥 取	島 根	山 口	香 川	徳 島	愛 媛
1971	広陵		浜田			池田	今治西
1972	広陵			柳井	高松一		
1973	広島商	鳥取西	浜田商	萩商	高松商	鳴門工	今治西
1974	盈進			防府商	丸亀商		
1975	広島商		江の川	柳井商			新居浜商
1976	崇徳		浜田	宇部商	高松商	徳島商	今治西
1977	広島商		浜田	柳井商	高松商		今治西
1978	広島工	倉吉北	三刀屋	南陽工	高松商	徳島商	松山商
1979	広島商	境	浜田	豊浦	高松商	池田	新居浜商
1980	広陵	倉吉北	浜田	岩国商	高松商	鳴門	南宇和
1981	広島商	鳥取西	浜田	下関商	志度商	徳島商	今治西
1982	広島商	境	益田	宇部商	坂出商	池田	川之江
1983	広島商	米子東	大田	宇部商	高松商	池田	川之江
1984	広島商	境	益田東	柳井	三本松	徳島商	松山商
1985	広島工	鳥取西	大社	宇部商	志度商	徳島商	川之江
1986	広島工	米子東	浜田商	岩国商	尽誠学園	池田	松山商
1987	広島商	八頭	江の川	徳山	尽誠学園	池田	宇和島東
1988	広島商	米子商	江の川	宇部商	坂出商	池田	松山商
1989	近大福山	米子東	出雲商	桜ヶ丘	尽誠学園	小松島東	宇和島東
1990	山陽	境	津和野	宇部商	丸亀	徳島商	松山商
1991	西条農	米子東	益田農林	宇部商	坂出商	池田	川之江
1992	広島工	倉吉北	大社	山口鴻城	尽誠学園	池田	西条
1993	西条農	鳥取西	松江第一	光	三本松	徳島商	宇和島東
1994	山陽	八頭	江の川	光	坂山商	小松島西	宇和島東
1995	宮島工	倉吉東	江の川	下関商	観音寺中央	鳴門	松山商
1996	高陽	八頭	益田東	防府商	高松商	新野	松山商
1997	如水館	八頭	浜田	西京	丸亀城西	徳島商	宇和島東

全国高校野球選手権大会の教育学

表2 代表校・優秀成績校一覧

年	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎
1971		筑紫工		海星		鶴崎工	都城農
1972	高知商	東筑		海星		津久見	
1973	高知商	柳川商	唐津商	海星	八代東	日田林工	高鍋
1974	高知	福岡第一		佐世保工		佐伯鶴城	延岡
1975	土佐	小倉南		諫早	九州学院		日南
1976		柳川商		海星	熊本工	柳ヶ浦	福島
1977	高知	九州産	佐賀商		熊本工	津久見	都城
1978	高知商	東筑	小城	佐世保工	熊本工大附	日田林工	延岡学園
1979	高知	八幡大附	佐賀商	諫早	済々饗	大分商	都城
1980	高知商	田川	佐賀龍谷	瓊浦	熊本工	大分商	日向学院
1981	高知	福岡大大濠	佐賀学園	長崎西	鎮西	津久見	都城商
1982	高知商	八幡大附	佐賀商	佐世保工	熊本工	津久見	都城
1983	高知商	久留米商	鳥栖	佐世保工	東海大二	中津工	高鍋
1984	明德義塾	福岡大大濠	唐津商	海星	鎮西	別府商	都城
1985	高知商	久留米商	佐賀商	佐世保実	熊本西	津久見	延岡商
1986	高知商	西日本短大附	唐津西	島原中央	熊本工	佐伯鶴城	日南
1987	伊野商	東筑	佐賀工	長崎商	九州学院	柳ヶ浦	延岡工
1988	高知商	福岡第一	佐賀商	小浜	熊本工	津久見	宮崎南
1989	土佐	福岡大大濠	佐賀商	海星	熊本工	鶴崎工	日向
1990	高知商	西日本短大附	佐賀学園	海星	済々饗	藤蔭	都城
1991	明德義塾	柳川	佐賀学園	瓊浦	熊本工	柳ヶ浦	延岡学園
1992	明德義塾	西日本短大附	佐賀東	佐世保実	熊本工	柳ヶ浦	延岡工
1993	高知商	東福岡	鳥栖商	長崎日大	城北	大分工	小林西
1994	宿毛	九州工	佐賀商	長崎北陽台	済々饗	松ヶ浦	延岡学園
1995	高知商	柳川	佐賀龍谷	長崎日大	城北	日田	日南学園
1996	明德義塾	東筑	唐津工	波佐見	熊本工	佐伯鶴城	都城
1997	高知商	福岡工大付	佐賀商	長崎南山	文徳	大分商	宮崎日大

年	鹿児島	沖縄
1971	玉龍	
1972	鹿児島商	名護
1973	鹿児島実	前原
1974	鹿児島実	
1975	鹿児島商	石川
1976	鹿児島実	豊見城
1977	鹿児島商工	豊見城
1978	鹿児島実	豊見城
1979	鹿児島実	中部工
1980	川内実	興南
1981	鹿児島実	興南
1982	鹿児島商工	興南
1983	鹿児島実	興南
1984	鹿児島商工	沖縄水産
1985	鹿児島商工	沖縄水産
1986	鹿児島商	沖縄水産
1987	鹿児島商工	沖縄水産
1988	鹿児島商	沖縄水産
1989	鹿児島商工	石川
1990	鹿児島実	沖縄水産
1991	鹿児島実	沖縄水産
1992	鹿児島商工	沖縄尚学
1993	鹿児島商工	浦添商
1994	樟南	那覇商
1995	鹿児島商	沖縄水農
1996	鹿児島実	前原
1997	鹿児島実	浦添商

⑤関西大会、⑥兵庫大会、⑦山陽大会、⑧山陰大会、⑨四国大会、⑩九州大会の10地方大会であり開催地の兵庫県だけが地方代表でなく県単代表であることが異色であるが、第2回大会では①東北大会、②関東大会、③東海大会、④北陸大会、⑤京津大会、⑥大阪大会、⑦兵庫大会、⑧紀和大会、⑨山陽大会、⑩山陰大会、⑪四国大会、⑫九州大会と東京大会が関東大会に改編され、第1回大会に参加のなかった北陸地区での地方大会が開かれるとともに、関西大会が大阪大会と紀和大会に二分され兵庫県と大阪府の関西地域の2府県は単代表を出すことに改められた。更に第4回大会においては関東大会が再編されて関東大会と京浜大会に、北陸大会に参加していた長野県が山梨県と組み合わせられて甲信大会に改編され代表校が2校増えて14校となった。第6回大会からは北海道大会が設けられ代表校が15校となり、第7回大会からは満州と朝鮮で地方大会が行なわれ代表校が17校となった。第9回大会から台湾大会が行なわれ、また京浜大会から東京が分離独立し、神奈川・静岡両県で神静大会、北陸大会に参加してきた新潟県を甲信地区に加えて甲信越大会に再編されて代表校数は19となった。第11回大会から東北大会が二分され東北大会と奥羽大会になり、九州大会も南北に二分され代表校数は21になった。第12回大会から関東大会が二分されて群馬、栃木、埼玉の北関東大会と茨城・千葉両県の南関東大会になり、代表校は22校となり、1940年の26回大会までの地方大会は22を維持することになった。敗戦の翌年から再開された「全国中等学校野球選手権大会」も旧植民地の地方大会を除いて19の地方大会（北海道、奥羽、東北、北関東、南関東、東京、信越、山静、東海、北陸、京津、大阪、兵庫、紀和、山陽、山陰、四国、北九州、南九州）でおこなわれた。「全国中等学校野球選手権大会」の最後の地方大会は、①北海道大会、②奥羽大会（青森・岩手・秋田の3県）、③東北大会（山形・福島・宮城の3県）、④北関東大会（茨城・栃木・群馬の3県）、⑤南関東大会（埼玉・千葉・神奈川の3県）、⑥信越大会（新潟・長野の2県）、⑦東京大会、⑧山静大会（山梨・静岡の2県）、⑨東海大会（愛知・岐阜・三重の3県）、⑩北陸大会（富山・石川・福井の3県）、⑪京津大会（京都・滋賀の2県）、⑫大阪大会、⑬兵庫大会、⑭紀和大会（奈良・和歌山の2県）、⑮山陽大会（岡山・広島・山口の3県）、⑯山陰大会（鳥取・島根の2県）、⑰四国大会（香川・徳島・愛媛・高知の4県）、⑱北九州大会（福岡・佐賀・長崎の3県）、⑲南九州大会（熊本・宮崎・鹿児島）で行なわれ、単独都道府県代表は北海道、東京、大阪、兵庫のわずか4つしかなかった。

(2)

新学制に移行して、その名も「全国高等学校野球選手権大会」と装いを新たにしたが、その直後は参加校数も急増し、それに伴って代表校数も23と増えている。新制高等学校の発足に伴って、校名変更や学校の改組が重なり、高等学校制度の歩みから見ると非常に興味深いものがある。この時期には伝統ある旧制中学の後身である学校や全国的に

みて有数の進学校（例えば湘南高校、天王寺高校、高津高校、芦屋高校などが挙げられよう）が全国大会でも活躍しているのが目を見張るほどである。旧制の第一中学の名残りとも思われる〇〇一高（たとえば岐阜一高、静岡一高）も甲子園で活躍している。

通常高校四原則といわれる新制高校発足当時の理念（民主的な後期中等教育機関として高等学校を定着させるための四原則、①地域制、②男女共学、③総合制（＝職業課程と普通課程を同一学校内に共存させた制度、職業教育の効率化を促進するために「産業教育振興法」などによって次第に崩壊していく）、④全日制と定時制の同一内容での教育と積極的な交流）が「全国高等学校野球選手権大会」の代表校にどのように反映していたであろうか。

第32回大会で三岐代表となった長良高校は岐阜商業の商業科を引き継いだ形で「総合制高校」として学区制に基づいて再編された学校であり、新制高校の発足時に地域の高等学校として甲子園に歩を進めた（興味深いことにこの学校は県予選の決勝では岐阜工高に負けているが、県代表として三岐大会に進み、その決勝では岐阜工高に逆転で勝ち、三岐代表になっている）し、第31回大会で惜しくも全国制覇を逃した岐阜高校（第30回大会では岐阜一高校の名称で代表校となっている）は旧制岐阜中学と旧制岐阜高等女学校が合併して誕生した男女共学の新制高校であるし、第50回大会でエースとして大活躍をし、チームを準優勝に導いた新浦寿夫投手は静岡商業の定時制課程に在籍しており、全日制の生徒に交じって選手として活躍した。全日制の生徒と定時制の生徒が分け隔てなく交流していた一つの例ではなかろうか。男女共学に的を絞って考察するならば、前身が実科女学校である、取手二高校が1983年の第66回大会で優勝しているし、弘前実業高校は弘前商業と弘前立市高等女学校が合併したものであるし、鹿児島玉龍高校は鹿児島市立中学と鹿児島市立高等女学校とが合併して誕生したものである。公立高校ばかりではなく、私学においても前身が女学校であるものも少なからず甲子園に代表校として歩を進めている。近年では甲子園の常連となっている新潟県の中越高校や西東京の堀越高校（タレントの多くが在籍していることでも有名であるが）や大分県の柳ヶ浦高校は前身が女学校である。

新学制の発足により「総合制」高校として代表校となった高校は、第32回大会で優勝した松山東（前身の一つは旧制の松山商業）、長良（前身の一つは旧制の岐阜商業）、瑞陵（前身の一つは旧制の愛知商業）であり、城東（前身の一つは旧制の徳島商業）、「総合制」高校としては山城高校（商業科と普通科を設置）・桂高校（商業科・農業科・普通科を設置）も代表校となっている。

代表校数に目を転ずるならば、新学制の発足の第30回大会以降第39回大会までは23校であり、23の地区は①北海道、②奥羽（青森・岩手・秋田）、③東北（山形・宮城・福島）、④北関東（茨城・栃木・群馬）、⑤南関東（埼玉・千葉）、⑥東京、⑦神奈川、⑧信

越（新潟・長野）、⑨山静（山梨・静岡）、⑩愛知、⑪三岐（三重・岐阜）、⑫北陸（富山・石川・福井）、⑬京津（滋賀・京都）、⑭大阪、⑮兵庫、⑯紀和（奈良・和歌山）、⑰東中国（岡山・鳥取・島根）、⑱西中国（広島・山口）、⑲北四国（香川・愛媛）、⑳南四国（徳島・高知）、㉑福岡、㉒西九州（佐賀・長崎・熊本）、㉓東九州（大分・宮崎・鹿児島・沖縄）であり、都道府県の単独代表は北海道、東京、神奈川、愛知、大阪、兵庫、福岡の7都道府県代表のみであった。

1948年の第30回大会から1957年の第39回大会までの10年間の代表校に見られる特色は、地域の名門校が代表校の座を占め、小倉・芦屋両高校の優勝など選手権大会でも大活躍をしていることである。第30回大会の代表校の天王寺高校・芦屋高校・桐蔭（前身は旧制の和歌山中学）・静岡一（前身は旧制の静岡中）・岐阜一（前身の一つは旧制岐阜中）、第31回大会では岐阜（準優勝 前年は岐阜一高校として代表校となっている）・高津高校・芦屋高校・千葉一（前身は旧制の千葉中）・明石高校（前身は明石中）・済々黌高校、第32回大会では明石高校（前身は明石中）・済々黌高校・盛岡高校（前身は盛岡中）、第34回大会では優勝した芦屋高校をはじめ、八尾高校などあげられよう。私学においても進学校として著名な湘南高校が第31回大会で優勝していることも見落とせないことである。いわば「スポーツと学業の両立」が成し遂げられていた時期であったともいえよう。高校四原則も1951年6月に制定された「産業教育振興法」と同年11月の政令改正諮問委員会の「教育改革に関する答申」により、「総合制」高校から職業科の分離・独立が促進され、松山商業高（「総合制」高校として松山東高校に統合されていた）・岐阜商業（同じく長良高校）・徳島商業（同じく城北高校・城東高校）などの商業高校が復活し、甲子園の選手権大会でも素晴らしい成績をおさめた（第35回大会優勝校は松山商業高校、第38回大会準優勝の岐阜商業高校はその代表的なものである）のがこの時期の後半に顕著な事実である。（商業高校の復活は学区の拡大という側面をもっており、府県内で有望中学生が特定の商業高校へ集中して進学した結果によるものと考えられる。近年では、私立の野球「名門校」が府県内に留まらず、近隣諸府県のみならず遠隔地の有望中学生を集めて甲子園の選手権大会に出場する機会を得ている。県外からの生徒がベンチ入りする数を制限する府県「高等学校野球連盟」もある。例えば広島の5名のように）

1958年の第40回記念大会から1967年の第49回大会までの10年間の特色は、ベビーブーマーの高校への殺到の時期を含み（1962～1967）、かつ高等学校への進学率の上昇もあって参加校数が大きく増えているのである。第40回記念大会は沖縄代表を含めて全都道府県が代表校を送って選手権大会で競った。この記念大会を機に、予選・選手権大会を通じて完全なロック・アウト形式のトーナメント方式が確立された。夏の大会では高校球児にとって負けは終わりを意味するものとなったのである。この時期に顕著なのは公立の職業高校（特に商業学校）と私立学校の活躍である。またこの10年間に第44回大会の

作新学院高校と第48回大会の中京商が春の選抜大会に引き続き春夏連覇を達成している。1959年の第41回大会の代表校数は29であり、第30回大会から第39回大会の23から一挙に6校も増えている。第41回大会の代表を決定する地方大会は、北海道が二分されて南北に分かれ、北空知、旭川・名寄・十勝・釧路・北見の地区予選を行なう①北北海道と函館・小樽・室蘭・札幌・南空知の地区予選を行なう、②南北海道、③北奥羽（青森・岩手）、④西奥羽（秋田・山形）、⑤東北（宮城・福島）、⑥東関東（茨城・千葉）、⑦北関東（栃木・群馬）、⑧西関東（埼玉・山梨）、⑨東京、⑩神奈川、⑪北越（新潟・富山）、⑫長野、⑬静岡、⑭愛知、⑮三岐（三重・岐阜）、⑯北陸（石川・福井）、⑰京滋（京都・滋賀）、⑱大阪、⑲兵庫、⑳紀和（奈良・和歌山）、㉑東中国（岡山・鳥取）、㉒広島、㉓西中国（島根・山口）、㉔北四国（香川・愛媛）、㉕南四国（徳島・高知）、㉖福岡、㉗西九州（佐賀・長崎）、㉘中九州（熊本・大分）、㉙東九州（宮崎・鹿児島・沖縄）に再編され、3県による地方大会は南九州大会のみとなるとともに、都道府県の単独代表校は、南北北海道・東京・神奈川・長野・静岡・愛知・大阪・兵庫・広島・福岡の10都道府県の11校となり、翌1960年の第42回大会から1972年の第54回大会までは南九州大会が再編されて、鹿児島が単独代表となり、南九州大会は宮崎・沖縄両県が争われることとなり、①北北海道、②南北海道、③北奥羽、④西奥羽、⑤東北、⑥東関東、⑦北関東、⑧西関東、⑨東京、⑩神奈川、⑪北越、⑫長野、⑬静岡、⑭愛知、⑮三岐、⑯北陸、⑰京滋、⑱大阪、⑲兵庫、⑳紀和、㉑東中国、㉒広島、㉓西中国、㉔北四国、㉕南四国、㉖福岡、㉗西九州、㉘中九州、㉙鹿児島、㉚南九州（宮崎・沖縄）に再編された。第48回大会では宮崎県の大宮高校を破って代表の座を自力で掴んだ沖縄県の興南高校は惜しくも緒戦で南関東代表の群馬県の竜ヶ崎第一高校に5－6で惜敗したことも、昨今の沖縄代表の甲子園での活躍ぶりから考えると隔世の感を覚える。

1968年の第50回記念大会から1977年の第59回大会までの10年間には高校への進学率の上昇もあって参加校数は着実に増加し、それに伴って代表校の数も第56回大会は34に、第57回大会では38に、第58・59回大会は41と増加されたが、この時期には、東海大相模（第52回大会）・東海大姫路（第59回大会）という全国制覇を遂げた高校を含めて日大一・日大桜丘・東海大工が代表校の座を占め、進行中の起こる私立高校の再編・系列化の大きさを特語している。この10年間の選手権大会への出場校には若干ではあるが工業高校が多くなっていることである（ちなみに初めて工業高校が全国制覇を成し遂げたのは、第47回大会の三池工業高校であるが、この三池工業は鉱山の町大牟田市の高校で、チームのなかには鉱山関係者の子弟が9名もいたことも地域の特色を色濃く反映していた。）。特筆すべきこととして、第51回大会では、「野球後進」県といわれた北奥羽代表の三沢高校が決勝戦に進出し、松山商業との決勝戦で延長18回を戦い、0－0の引き分け、再試合で2－4で惜敗したことである。同じ第51回大会には生徒が監督として出場して

いる。(日本高等学校野球連盟の選手資格規定に抵触する生徒を監督として登録した＝川越工粕谷千孝監督。)第53回大会では初出場校が全代表校30校中11校にものぼり、その一つの桐蔭学園高校が初出場で初優勝を成し遂げた。第56回大会から金属バットの使用が認められ、オーバー・フェンスの本塁打が11本を数え、打球が速くなったこともあって、以後高校野球の戦法が大きく変化することとなっていた。

先に述べたようにこの10年間の後半に地方大会の再編がなされる。第56回大会では、地方大会は①北北海道、②南北海道、③奥羽大会(青森・秋田)、④岩手、⑤東北(山形・宮城)、⑥福島、⑦茨城、⑧北関東(栃木・群馬)、⑨西関東(埼玉・山梨)、⑩千葉、⑪東東京(区部)、⑫西東京(主として三多摩地区)、⑬神奈川、⑭新潟、⑮長野、⑯静岡、⑰愛知、⑱三岐(三重・岐阜)、⑲北陸(富山・石川)、⑳福滋(福井・滋賀)、㉑京都、㉒大阪、㉓兵庫、㉔紀和(奈良・和歌山)、㉕東中国(岡山・鳥取)、㉖広島、㉗西中国(島根・山口)、㉘北四国(香川・愛媛)、㉙南四国(徳島・高知)、㉚福岡、㉛西九州(佐賀・長崎)、㉜中九州(熊本・大分)、㉝南九州(宮崎・沖縄)、㉞鹿児島の34となり、都道府県の単独代表は南・北北海道、岩手、福島、茨城、千葉、東・西東京、神奈川、新潟、長野、静岡、愛知、京都、大阪、兵庫、広島、福岡、鹿児島の17都道府県19代表となり、翌1975年の第57回大会では、①北北海道、②南北海道、③奥羽大会(青森・秋田)、④岩手、⑤東北(山形・宮城)、⑥福島、⑦茨城、⑧栃木、⑨北関東(群馬・山梨)、⑩埼玉、⑪千葉、⑫東東京(区部)、⑬西東京(主として三多摩地区)、⑭神奈川、⑮新潟、⑯長野、⑰静岡、⑱愛知、⑲岐阜、⑳三重、㉑北陸(富山・石川)、㉒福滋(福井・滋賀)、㉓京都、㉔大阪、㉕兵庫、㉖紀和(奈良・和歌山)、㉗岡山、㉘広島、㉙山陰(鳥取・島根)、㉚山口、㉛北四国(香川・愛媛)、㉜南四国(徳島・高知)、㉝福岡、㉞西九州(佐賀・長崎)、㉟中九州(熊本・大分)、㊱宮崎、㊲鹿児島、㊳沖縄の38代表となり、都道府県単独の代表は南・北北海道、岩手、福島、茨城、栃木、埼玉、千葉、東・西東京、神奈川、新潟、長野、静岡、愛知、岐阜、三重、京都、大阪、兵庫、岡山、広島、山口、福岡、宮崎、鹿児島、沖縄の25都道府県27代表となり、翌1976年の第58回大会では①北北海道、②南北海道、③奥羽大会(青森・秋田)、④岩手、⑤山形、⑥宮城、⑦福島、⑧茨城、⑨栃木、⑩北関東(群馬・山梨)、⑪埼玉、⑫千葉、⑬東東京(区部)、⑭西東京(主として三多摩地区)、⑮神奈川、⑯新潟、⑰長野、⑱静岡、⑲愛知、⑳岐阜、㉑三重、㉒北陸(富山・石川)、㉓福滋(福井・滋賀)、㉔京都、㉕大阪、㉖兵庫、㉗紀和(奈良・和歌山)、㉘岡山、㉙広島、㉚山陰(鳥取・島根)、㉛山口、㉜香川、㉝南四国(徳島・高知)、㉞愛媛、㉟福岡、㊱西九州(佐賀・長崎)、㊲熊本、㊳大分、㊴宮崎、㊵鹿児島、㊶沖縄の41代表となり、県大会を経て行われる地方大会は、奥羽大会、北関東大会、北陸大会、福滋大会、紀和大会、山陰大会、南四国大会、西九州大会のわずか7大会となり、31都道府県33代表が単独の府県代表になった。

1978年の第60回記念大会以降、南北北海道代表と東西東京代表と府県代表の49校が選手権大会で覇を競うという今日の代表選出方式が定着する。

(3)

高校野球が高等学校スポーツでは異色の地位を占めるものであることは、それが各地の大会が新聞やTV・ラジオを通じて報道され、また全国大会においては関西地区ではNHKのみならず朝日TVとUHF局（主としてサンTV）との共同で完全実況中継がなされているという点にもあらわれている。スポーツ新聞の紙面はいうに及ばず、全国紙、地域紙、地方紙のスポーツ面も高校野球の記事で埋められ、また週間朝日やアサヒグラフの毎年増刊号を発行している。こうしてみると、報道の側面においてはまさに高校野球は高校スポーツの“横綱”であるということができよう。ところが、1996年6月30日付の朝日新聞は「高校野球地方大会 参加校、戦後初めて減少」と題する記事を掲載した。この記事では千葉・神奈川両県で部員数の不足で参加しない日本高等学校野球連盟加盟校が生まれ、生徒数の減少が高等野球にも影響を及ぼし、商業・農林系の高校での部員確保が困難になっており、大分県の日田三隅高校では野球部員が三年生の4人だけであるとも報じ、最近5年間の部員数の推移を見ると、野球部員が8000人減ったのに対し、サッカーが約31000人、バスケット部員が約26000人増えており、「野球離れ」が進行しており、「スポーツで汗を流すよりはアルバイトの傾向」も強くなってきているとの教師の弁を紹介している。また1996年12月25日付の「週間サッカーマガジン」は高校サッカー選手権への参加校と加盟校数で野球を上回ったことを報じている。

生徒数が漸減の傾向が続き、「野球離れ」、部活離れの中でも、毎年甲子園で行われる全国高等学校野球選手権大会は60万人を超える観客を集め、野球好き・スポーツ愛好者の耳目を魅了している。トーナメント形式での、府県を代表しての大会、また攻守の入れ替えが明確な形態を取ることは、多数の応援団を形成する要因になり、交通の便がよく、良好な競技場での競技が苛酷なスケジュールの中にあっても、依然として高校野球を高校スポーツの“花形”たらしめているのである。

1978年の第70回大会からは南北北海道・東西東京の代表と府県代表の49校が甲子園で覇を競う形式を採用することとなった。この20年間の動向を朝日新聞の代表校紹介を素材に見ていこう。

(A) 学校数と参加校数

表3は学校基本調査による高校数（本校＋分校）と高等学校野球選手権大会への参加校およびその比率等を示したものである。高等学校在籍者数も第一次および第二次のベビーブーマーの時期の1965年と1989年を二つの頂点としていることを示しているし、高等学校への進学率も1974年には90%を超え（男子生徒の高校への進学率も1974年には90%を超えている）、その後の二十余年間でわずか5%上昇したのみであり、これ以上の

さらなる上昇は期待できない。高等学校数は、生徒数の減少と教育効果の維持・向上を名目とした統廃合の進展で1988年の5512校を頂点としているが、高等学校野球選手権大会への参加校は1995年の4098校が最高の数値となっており、参加率の上昇が1995年まで続いたことがこのような形であらわれている。生徒数が減少し、野球部員も減り、選手権大会・選抜大会で全国制覇を成し遂げた高等学校でも選権県大会の県予選の緒戦で敗退するという事態もあちこちで聞かれる。一方、参加校数は第二次世界大戦後、増加の一途を辿ってきたが、ついに1996年には前年より9校減少した。またこの参加校数の減少に伴って、戦後一貫して上昇を続けていた参加率も1996年には下降している。(参加率は1954年に一度低下しているため、二度目の低下である。)

第60回大会が開催された1978年からこの20年間の高校への進学率は93.5%から95.7%であり(男子では92.8%~94.8%である)、高校在籍者数は4414896人から第二次ベビーブーマーの時期の5644376人(1989年)を極大値とし、1996年には4547497人と少子化現象の進行を反映している。にもかかわらず、参加校数は高等学校在籍者数が最高値を記録した1989年の3990から高等学校在籍者数が減少して4724945人となった1995年に最高の4098にまで達している。

全国高等学校野球選手権大会への高等数等を府県単位で見てもよい。表4は都道府県別の高校数等の推移を示したものであり、表5は高校数の、表6は参加校数の、表7は参加率の、上位5県と下位5県をそれぞれ摘出したものである。表5からは1997年度では東京、北海道、大阪、神奈川、愛知、兵庫、埼玉、千葉(以上200超)、福岡、静岡、広島、茨城、新潟、宮城、福島、岡山、長野、京都、鹿児島(以上100超)の都道府県での学校数が多く、鳥取、福井、香川、佐賀(以上50未満)、山梨、島根の各県は学校数が少ない。表6からは1997年度は参加校数が多く、予選を勝ち抜くことが困難な地区は神奈川(200超)、大阪、愛知、千葉、兵庫、埼玉、南北海道、東東京、福岡、北北海道、西東京、静岡、茨城、新潟の順で、これらの地区は参加校数が100を超えているが、他方鳥取、福井、高知、和歌山、香川、島根、佐賀、山梨、富山、宮崎、滋賀の順で参加校が少なく、代表となることが比較的容易な地区であり、参加校数は50を下回っている。最大の参加校の神奈川県では204校が覇を競うのに対して、最小の鳥取県では僅か26校の勝者が代表権を獲得している。形式的な都道府県を単位とする代表校の決定(東京および北海道は2地区に分けられているが)は必ずしも合理的なものとは言い難い。表7に示される参加率は硬式野球を部活動として選択し、「甲子園への出場」を夢みる高校生が一定数以上在籍する学校の比率を示すものであるが、それは別の意味では女子高校の比率の低い都道府県ほど高くなるというものでもある。この表から沖縄、佐賀、岩手の各県が恒常的に参加率が高く、岡山、東京、高知の各都府県恒常的に参加率は低いことが明瞭となる。高校数が100を超える長野、新潟、千葉、鹿児島、茨城、北海道の道県が参加

全国高校野球選手権大会の教育学

表3 高校数・高校への進学率・高校生数

年	高校数	参加校数	参加率	進学率(全体)	進学率(男子)	進学率(女子)	高校生数
1948	3575	1256	35.13				1203963
1949	4180	1365	32.66				1624625
1950	4292	1536	35.79	42.5	48.0	36.7	1935118
1951	4477	1633	36.48	45.6	51.4	39.6	2193362
1952	4506	1653	36.68	47.6	52.9	42.1	2342869
1953	4572	1701	37.20	48.3	52.7	43.7	2528000
1954	4606	1705	37.02	50.9	55.1	46.5	2545254
1955	4607	1721	37.36	51.5	55.5	47.4	2592001
1956	4575	1739	38.01	51.3	55.0	47.6	2702604
1957	4577	1769	38.65	51.4	54.3	48.4	2897646
1958	4586	1807	39.40	53.7	56.2	51.1	3057190
1959	4615	1864	40.39	55.4	57.5	53.2	3216152
1960	4598	1903	41.39	57.7	59.6	55.9	3239416
1961	4602	1941	42.18	62.3	63.8	60.7	3118896
1962	4637	1996	43.05	64.0	65.5	62.5	3281522
1963	4811	2107	43.80	66.8	68.4	65.1	3896682
1964	4847	2270	46.83	69.3	70.6	67.9	4634407
1965	4849	2363	48.73	70.7	71.7	69.6	5073882
1966	4845	2415	49.85	72.3	73.5	71.2	4997385
1967	4827	2460	50.96	74.5	75.3	73.7	4780628
1968	4817	2485	51.59	76.8	77.0	76.5	4521956
1969	4817	2523	52.38	79.4	79.2	79.5	4337772
1970	4798	2547	53.08	82.1	81.6	82.7	4231542
1971	4791	2569	53.62	85.0	84.1	85.9	4178327
1972	4810	2614	54.35	87.2	88.3	88.2	4154647
1973	4862	2660	54.71	89.4	89.7	90.6	4201223
1974	4916	2709	55.11	90.8	91.0	91.9	4270943
1975	4946	2798	56.57	91.9	91.7	93.0	4333079
1976	4978	2893	58.12	92.6	92.2	93.5	4386218
1977	5028	2985	59.37	93.1	91.7	94.0	4381137
1978	5098	3074	60.30	93.5	92.7	94.4	4414896
1979	5135	3170	61.73	94.0	93.0	95.0	4484870
1980	5208	3270	62.79	94.2	93.1	95.4	4621930
1981	5213	3394	65.11	94.3	93.2	95.4	4682827
1982	5369	3466	64.56	94.3	93.2	95.5	4600551
1983	5427	3568	65.75	94.0	92.8	95.2	4716105
1984	5427	3705	68.27	93.9	92.8	95.0	4891917
1985	5453	3791	69.52	93.8	92.8	94.9	5177681
1986	5491	3847	70.06	93.8	92.8	94.9	5259307
1987	5508	3900	70.81	93.9	92.8	95.0	5375107
1988	5512	3958	71.81	94.1	92.9	95.3	5533393
1989	5511	3990	72.40	94.1	93.0	95.3	5644376
1990	5506	4027	73.14	94.4	93.2	95.6	5623336
1991	5503	4046	73.52	94.6	93.5	95.8	5454929
1992	5501	4059	73.79	95.0	93.9	96.2	5218497
1993	5501	4071	74.00	95.3	94.2	96.5	5010472
1994	5497	4088	74.37	95.7	94.6	96.8	4862725
1995	5501	4098	74.50	95.8	94.7	97.0	4724945
1996	5496	4089	74.40	95.9	94.8	97.1	4547497
1997	5496	4093	74.47				4724947

※ 学校基本調査より
1997年は速報値

全国高校野球選手権大会の教育学

表4 高校数・参加校数・参加率(数値)

地 区	1975			1980			1985			1990			1991			1992		
	高校数	参加校数	参加率															
北海道	312	218	69.87	322	251	77.95	337	276	81.90	340	286	84.12	338	284	84.02	338	287	84.91
北北海道		114			125			134			132			133			134	
南北海道		104			126			142			154			151			153	
青森	91	48	52.75	89	54	60.67	91	64	70.33	90	67	74.44	90	66	73.33	90	66	73.33
岩手	102	77	75.49	99	82	82.83	99	85	85.86	100	88	88.00	100	90	90.00	100	90	90.99
秋田	82	43	52.44	77	48	62.34	71	51	71.83	67	51	76.12	67	51	76.12	66	51	77.27
山形	79	52	65.82	78	52	66.67	78	56	71.79	76	56	73.68	72	56	77.78	72	56	77.78
宮城	101	55	54.46	103	62	60.19	110	73	66.36	110	76	69.09	111	76	68.47	111	76	68.47
福島	118	61	51.69	112	69	61.61	112	73	65.18	113	78	69.03	113	78	69.03	113	78	69.03
茨城	98	75	76.53	111	82	73.87	124	100	80.65	131	108	82.44	131	108	82.44	131	108	82.44
栃木	73	54	73.97	80	61	76.25	83	65	78.31	83	67	80.72	83	67	80.72	83	67	80.72
群馬	78	37	47.44	82	45	54.88	87	54	62.07	87	60	68.97	87	61	70.11	87	61	70.11
埼玉	137	70	51.09	179	98	54.75	208	150	72.12	212	163	76.89	212	162	76.42	212	163	76.89
千葉	127	84	66.14	171	131	76.61	201	166	82.59	206	175	84.95	206	175	84.95	207	176	85.02
東京	431	176	40.84	456	211	46.27	465	237	50.97	467	258	55.25	468	260	55.56	467	260	55.67
東京都		94			105			111			119			119			117	
東京都		82			106			126			139			141			143	
神奈川	180	88	48.89	219	134	61.19	248	188	75.81	259	201	77.61	259	202	77.99	260	202	77.69
新潟	156	78	50.00	142	85	59.86	136	103	75.74	129	108	83.72	128	108	84.38	129	108	83.72
長野	111	66	59.46	107	72	67.29	136	88	64.71	107	96	89.72	107	96	89.72	107	96	89.72
山梨	46	30	65.22	48	34	70.83	49	40	81.63	49	41	83.67	49	42	85.72	49	42	85.71
静岡	130	80	61.54	135	89	65.93	148	102	68.92	148	106	71.62	148	107	72.30	148	108	72.97
愛知	189	111	58.73	216	145	67.13	232	163	70.26	236	175	74.15	236	176	74.58	236	178	75.42
岐阜	86	35	40.70	95	45	47.37	98	58	59.18	97	64	65.98	96	64	66.67	96	65	67.71
三重	71	54	76.06	75	58	77.33	78	65	83.33	81	66	81.48	81	67	82.72	81	67	82.72
富山	58	54	70.69	56	41	73.21	59	46	77.97	59	49	83.05	59	49	83.05	59	49	83.05
石川	62	41	66.13	62	49	79.03	64	52	81.25	66	54	81.82	66	54	81.82	66	54	81.82
福井	36	25	69.44	37	23	62.16	38	28	73.68	39	29	74.36	38	30	78.95	38	30	78.95
滋賀	46	27	58.70	48	32	66.67	56	43	76.79	57	47	82.46	57	47	82.46	59	47	79.66
京都	92	53	57.61	99	61	61.62	103	70	67.96	104	72	69.23	104	73	70.19	104	73	70.19
大阪	223	132	59.19	259	144	55.60	283	167	59.01	287	181	63.07	288	183	63.54	285	186	65.26
兵庫	209	119	56.94	211	143	67.77	223	161	72.20	226	163	72.12	226	163	72.12	226	163	72.12
奈良	48	33	68.75	53	39	73.58	61	48	78.69	65	52	80.00	65	52	80.00	65	51	78.46
和歌山	53	29	54.72	51	31	60.78	51	33	64.71	53	37	69.81	54	37	68.52	54	37	68.52
岡山	108	37	34.26	111	39	35.14	108	43	39.81	107	50	46.73	108	51	47.22	108	50	46.30
広島	137	59	43.07	137	69	50.36	144	83	57.64	144	94	65.28	144	94	65.28	144	95	65.97
島根	56	29	51.79	53	30	56.60	52	32	61.54	53	38	71.70	53	39	73.58	52	39	75.00
鳥取	39	16	41.03	34	20	58.82	34	23	67.65	35	24	68.57	35	24	68.57	35	25	71.43
山口	88	47	53.41	92	49	53.26	91	56	61.54	92	60	65.22	92	60	65.22	92	60	65.22
香川	44	32	72.73	42	33	78.57	43	33	76.74	44	35	79.55	44	35	79.55	44	35	79.55
徳島	54	28	51.85	56	29	51.79	54	33	61.11	53	33	62.26	53	33	62.26	52	33	63.46
愛媛	70	47	67.14	71	54	76.06	73	59	80.82	74	60	81.08	74	60	81.08	74	61	82.43
高知	51	19	37.25	50	22	44.00	50	25	50.00	52	27	51.92	52	29	55.77	52	29	55.77
福岡	170	107	62.94	178	115	64.61	181	129	71.27	185	135	72.97	185	137	74.05	185	137	74.05
佐賀	42	34	80.95	43	37	86.05	43	39	90.70	46	42	91.30	46	42	91.30	46	42	91.30
長崎	91	33	36.26	91	41	45.05	89	53	59.55	88	59	67.05	88	59	67.05	88	59	67.05
熊本	84	44	52.38	85	52	61.18	86	57	66.28	85	59	69.41	85	59	69.41	85	59	69.41
大分	73	31	42.47	73	35	47.95	75	45	60.00	77	51	66.23	77	51	66.23	77	51	66.23
宮崎	61	39	63.93	60	43	71.67	60	44	73.33	61	45	73.77	61	46	75.41	60	47	78.33
鹿児島	107	70	65.42	107	80	74.77	108	82	75.93	102	84	82.35	103	85	82.52	104	85	81.73
沖縄	46	39	84.78	53	48	90.57	61	50	81.97	64	58	90.63	64	58	90.63	64	57	89.06
高校数等	4946	2798	56.57	5208	3267	62.73	5453	3791	69.52	5506	4027	73.14	5503	4046	73.52	5501	4059	73.79

全国高校野球選手権大会の教育学

表4 高校数・参加校数・参加率(数値)

1993			1994			1995			1996			1997			備 考(地域)
高校数	参加校数	参加率													
338	283	83.73	337	285	84.57	338	285	84.32	339	280	82.60	340	277	81.47	
	133			135			133			132			129		北空知、旭川、名寄、十勝、釧路、北見
	150			150			152			148			148		函館、小樽、室蘭、札幌、南空知
90	65	72.22	90	66	73.33	90	66	73.33	90	67	74.44	90	68	75.56	
100	89	89.00	100	89	89.00	100	90	90.00	100	90	90.00	100	90	90.00	
66	51	77.27	65	51	78.46	65	51	78.46	65	51	78.46	65	51	78.46	
71	56	78.87	71	55	77.46	71	55	77.46	71	55	77.46	72	55	76.39	
111	76	68.47	112	76	67.86	113	77	68.14	113	75	66.37	113	76	67.26	
113	78	69.03	113	78	69.03	113	79	69.91	113	80	70.80	113	81	71.68	
131	108	82.44	131	108	82.44	132	109	82.58	132	109	82.58	132	109	82.58	
83	67	80.72	83	67	80.72	83	67	80.72	84	67	79.76	84	67	79.76	
87	62	71.26	87	64	73.56	87	65	74.71	87	65	74.71	87	64	73.56	
212	165	77.83	212	165	77.83	212	166	78.30	210	163	77.62	210	165	78.56	
207	177	85.51	206	177	85.92	206	177	85.92	204	174	85.29	204	173	84.80	
467	262	56.10	465	264	56.77	464	262	56.47	462	262	56.71	458	260	56.77	
	118			118			117			138			137		区部(22)
	144			146			145			124			123		三多摩地区+世田谷区
260	204	78.46	260	205	78.85	261	205	78.54	262	204	77.86	262	204	77.86	
129	108	82.95	128	108	84.38	127	107	84.25	127	108	85.04	127	108	85.04	
107	96	89.72	107	96	89.72	107	95	88.79	107	98	91.59	107	98	91.56	
50	42	84.00	50	42	84.00	50	42	84.00	50	42	84.00	51	43	84.31	
149	108	72.48	149	108	72.48	149	109	73.15	149	110	73.83	149	110	73.83	
237	181	76.37	236	181	76.69	237	181	76.37	237	180	75.95	236	181	76.69	
96	66	68.75	96	65	67.71	96	64	66.67	96	64	66.67	94	66	70.21	
81	68	83.95	80	69	86.25	80	68	85.00	80	68	85.00	80	68	85.00	
59	49	83.05	59	48	81.36	59	48	81.36	59	48	81.36	59	47	79.66	
66	54	81.82	66	53	80.30	66	54	81.82	66	54	81.82	66	55	83.33	
38	30	78.95	38	30	78.95	39	30	76.92	39	30	76.92	39	29	74.36	
59	47	79.66	58	47	81.03	56	47	83.93	57	48	84.21	57	49	85.96	
104	73	70.19	105	74	70.48	105	74	70.48	104	74	71.15	104	74	71.15	
285	184	64.56	284	184	64.79	285	187	65.61	284	187	65.85	284	185	65.14	
227	162	71.37	229	163	71.18	229	166	72.49	229	166	72.49	229	166	72.49	
65	52	80.00	65	52	80.00	65	52	80.00	65	52	80.00	65	52	80.00	
54	37	68.52	54	37	68.52	54	37	68.52	54	37	68.52	54	36	66.67	
108	54	50.00	108	53	49.07	108	53	49.07	108	53	49.07	108	53	49.07	
144	96	66.67	143	98	68.53	143	99	69.23	143	99	69.23	143	98	68.53	
52	39	75.00	52	40	76.92	51	40	78.43	51	40	78.43	51	40	78.43	
35	26	74.29	35	26	74.29	35	26	74.29	35	26	74.29	35	26	74.29	
92	60	65.22	92	60	65.22	92	60	65.22	92	60	65.22	92	60	65.22	
44	35	79.55	44	35	79.55	45	36	80.00	45	36	80.00	45	37	82.22	
52	33	63.46	52	34	65.38	52	34	65.38	52	35	67.31	53	36	67.92	
74	61	82.43	74	61	82.43	74	61	82.43	74	61	82.43	74	61	82.43	
52	30	57.69	52	30	57.69	52	30	57.69	52	30	57.69	53	37	60.38	
185	139	72.43	185	136	73.51	185	137	74.05	185	135	72.97	186	137	73.66	
46	42	91.30	46	41	89.13	46	41	89.13	46	41	89.13	46	41	89.13	
88	60	68.18	89	60	67.42	89	60	67.42	88	59	67.05	88	60	68.18	
85	59	69.41	85	61	71.76	85	61	71.76	85	61	71.76	85	62	72.94	
77	52	67.53	77	52	67.53	77	51	66.23	77	51	66.23	77	51	66.23	
57	47	82.46	58	48	82.76	59	48	81.36	59	48	81.36	59	48	81.36	
104	86	82.69	104	86	82.69	104	86	82.69	104	87	83.65	104	86	82.69	
64	58	90.63	65	60	92.31	65	60	92.31	65	59	90.77	66	58	87.88	
5501	4079	74.00	5497	4088	74.37	5501	4098	74.50	5496	4090	73.40	5496	4093	74.47	

表5 高校数順位(都道府県名・年度)

順位	1975	1980	1985	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
第1位	東京										
第2位	北海道										
第3位	大阪										
第4位	兵庫	神奈川									
第5位	愛知										
第6位	神奈川	兵庫									
第7位	福岡	埼玉									
第8位	新潟	福岡	千葉								
第9位	埼玉	千葉	福岡								
第10位	広島	新潟	広島	静岡							
第11位	静岡	広島	新潟	広島							
第12位	千葉	静岡	長野	茨城							
第13位	福島	福島	茨城	新潟							
第14位	長野	100超	福島	福島	福島	福島	福島	福島	宮城	宮城	宮城
第15位	岡山		宮城	宮城	宮城	宮城	宮城	宮城	福島	福島	福島
第16位	鹿児島		岡山	長野	岡山						
第17位	岩手		鹿児島	岡山	長野						
第18位	宮城		100超	京都							
	100超			鹿児島							
				100超	100超	100超	100超	100超	100超		
第38位	徳島	島根	滋賀	滋賀	滋賀	滋賀	宮崎	宮崎	滋賀	滋賀	滋賀
第39位	和歌山	沖縄	徳島	和歌山							
第40位	高知	和歌山	島根	島根	島根	島根	島根	島根	徳島	徳島	徳島
第41位	奈良	高知	和歌山	徳島	徳島	徳島	徳島	徳島	高知	高知	高知
第42位	山梨	山梨	高知	高知	高知	高知	高知	高知	島根	島根	山梨
第43位	沖縄	滋賀	山梨	島根							
第44位	香川	佐賀	香川	佐賀							
第45位	佐賀	香川	佐賀	香川							
第46位	鳥取	福井									
第47位	福井	鳥取									

表7 上位および下位都道府県名（参加率）

順位	1975	1980	1985	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
第1位	沖縄	沖縄	佐賀	佐賀	佐賀	佐賀	佐賀	沖縄	沖縄	長野	長野
第2位	佐賀	佐賀	岩手	沖縄	沖縄	岩手	沖縄	長野	岩手	沖縄	岩手
第3位	茨城	岩手	三重	長野	岩手	長野	長野	佐賀	佐賀	岩手	佐賀
第4位	三重	石川	千葉	岩手	長野	沖縄	岩手	岩手	長野	佐賀	沖縄
第6位		北海道	北海道	北海道	千葉	千葉	山梨	千葉	三重	新潟	新潟
第7位		三重	山梨	新潟	新潟	北海道	三重	北海道	北海道	三重	三重
第8位		千葉	石川	山梨	北海道	新潟	北海道	新潟	新潟	滋賀	千葉
第9位		栃木	愛媛	富山	富山	富山	富山	山梨	山梨	山梨	山梨
第10位		愛媛	茨城	滋賀	三重	三重	新潟	宮崎	滋賀	鹿児島	石川
第11位				茨城	鹿児島	茨城	鹿児島	鹿児島	鹿児島	北海道	鹿児島
第12位		75%超	80%超	鹿児島	滋賀	愛媛	宮崎	茨城	茨城	茨城	茨城
第13位				石川	茨城	石川	茨城	愛媛	愛媛	愛媛	愛媛
第14位				三重	石川	鹿児島	愛媛	富山	石川	石川	香川
第15位				愛媛	愛媛	栃木	石川	滋賀	富山	富山	北海道
第16位				栃木	栃木		栃木	栃木	宮崎	宮崎	宮崎
第17位				奈良	奈良	80%超	奈良	石川	栃木	奈良	奈良
第18位								奈良	奈良	香川	
第19位				80%超	80%超		80%超		香川		80%超
								80%超		80%超	
									80%超		
全国平均	56.57	62.73	69.52	73.14	73.52	73.79	74.00	74.37	74.50	73.40	74.47
			60%未満								
第40位			大分								
第41位			長崎								
第42位			岐阜								
第43位	東京	岐阜	大阪	大阪	大阪	山口	大阪	山口	徳島	大阪	山口
第44位	岐阜	東京	広島	徳島	徳島	徳島	徳島	大阪	山口	山口	大阪
第45位	高知	長崎	東京	東京	高知						
第46位	長崎	高知	高知	高知	東京						
第47位	岡山										

率が高いことは注目されるべきであろう。特に北海道・長野に関しては地域的にも野球をすることには冬季の練習等にかかなりの工夫を必要とするものであり、“国民的”スポーツとしての野球の関心度の高さを示すものといえよう。他方、参加率の低い都府県では学校数での下位県である高知県があることは公立女子大学・公立女子高校あることと大いに関係があるものと推測される。高校数が多い都府県では、学校の種類が多種多様で男子高校が存在する傍ら同様に女子高校も存在することになり、東京・大阪・岡山といった高校数が100を超える都府県での参加率の多様化した高等学校の一面として女子校の存在を無視できないものであろう。

(B) 代表校の特色

この20年間の選手権大会に出場した代表校の総数は980（実数は440）を数える。その中には、甲子園常連と呼ばれる野球「名門校」も少なくない。戦前から代表校となっている高校もあれば、戦後創設されて「強豪」校と呼ばれたり、さらに第一次ベビーブーマーの時期を前にして創設もしくは改組されて「新鋭」校と呼ばれる高校も存在する。

☆「甲子園常連組」

天理高校と県立岐阜商業高校の12回の代表権獲得を筆頭に、高知商業高校の11回、仙台育英・星陵高校の10回、福井商業高校の9回、日大山形・東北・中越・松商学園・池田・熊本工・鹿児島実業・樟南・沖縄水産高校の8回、金沢・PL学園・智弁学園・東海大甲府・智弁和歌山・広島商業・徳島商業・松山商業・佐賀商業高校の7回、函館大有斗・秋田経法大付・東海大山形・学法石川・帝京・横浜・海星（三重）・高岡商・宇部商業高校の6回、北海・弘前実業・常総学院・前橋工業・横浜商・中京・明野（三重）・富山商業・比叡山・京都西・箕島・倉敷商業・高松商業・宇和島東・都城高校の5回など甲子園での選手権大会に何度も出場する機会を獲得している。この「甲子園常連組」ともいべき代表権獲得回数の5回以上の学校の選手権大会での成績を考えると、全国制覇を遂げた回数が15回（PL学園の4回を筆頭に帝京・天理2回、横浜・箕島・智弁和歌山・広島商業・池田・松山商業・高知商業・佐賀商業高校の各1回）、準優勝の回数は11回の多きを数える。ベスト4・ベスト8まで取るとこれらの「甲子園常連組」の進出はそれぞれ35回・71回であり、「甲子園常連組」の甲子園での活躍が目を引く。この「甲子園常連組」には50校があるが、北海道・東北地域の9校、関東地域6校、中部地域10校、関西地域9校、中国地域4校、四国地域6校、九州地域6校であるが、私立学校が29校と公立学校21校となっている。特に目に付くのは公立高等学校の職業科（特に商業科）高校が17校も含まれており、私立学校にも商業科の課程を設けていたり（中越・比叡山）、商業高校から改組したもの（例えば中京・松商学園・樟南など）があり、公立・私立を問わず職業学科を置く学校では学校自体が硬式野球の活動を奨励しているといえよう。地域的に見れば北海道・東北地域では私立学校が圧倒的多数であり、関東地域、

中部地域、関西地域では私立学校が多数を占めているが、中国地域はすべてが公立の商業高校であり、四国地域ではすべてが公立の高校であるが、その半数は商業高校である。九州地域の「甲子園常連組」はすべてが職業課程をもつ高校であり、公立・私立が半数ずつを占めている。商業高校、商業課程を含む学校はおしなべて女子生徒が多数を占めるが、これらの「甲子園常連組」も例外ではない。ついでにいうならば、中越高校は斉藤女学館が1956年に共学に踏み切り改組されたものである。いわば、クラスメイトの「黄色い声援」に支えられて「甲子園への切符」を手に入れようとするのであり、彼女らの声援に答えて甲子園でファインプレーをするのである。もう一つ加えるならば、仙台育英（甲子園出場の最高時5572名 1996年）、東北（同3183名 1993年）、常総学院（同2832名 1993年）、秋田経法大付（同2478名 1993年）、東邦（同2379名 1989年）、日大山形（同2338名 1993年）、星陵（同2169名 1991年）、鹿児島実業（同2108名 1979年）に共通する2000名を超える生徒を抱えていることである。他方、「甲子園常連組」で生徒数が少ないのは沖縄水産（甲子園出場の最低時409名 1988年）、宇部商（同468名 1982年）、明野（同557名 1979年）、P L学園（同597名 1996年）、智弁和歌山（同726名 1987年）、智弁学園（同734名 1984年）、富山商（同835名 1996年）、東海大山形（同850名 1982年）、池田（同907名 1992年）、都城（同940名 1979年）、高知商（同943名 1997年）であり、1000名をわっている。沖縄水産、P L学園は全寮制を採用する学校であり、明野、宇部商、池田も公立学校であり定員に制約されて恒常的に生徒数は少ない。巨大学校といわれる仙台育英などと比べると、生徒数が10%にも満たない。さらに「甲子園常連組」を複数もつ地区は南北海道（函館大有斗・北海）、山形（日大山形・東海大山形）、宮城（仙台育英・東北）、東東京（帝京・早稲田実）、神奈川（横浜・横浜商）、三重（海星・明野）、富山（高岡商・富山商）、石川（星陵・金沢）、奈良（天理・智弁学園）、和歌山（箕島・智弁和歌山）、岡山（岡山南・倉敷商）、徳島（池田・徳島商）、愛媛（松山商・宇和島東）、鹿児島（鹿児島実・樟南）であり、宮城（両校で18回出場）、石川（両校で16回出場）、奈良（両校で19回出場）、鹿児島（両校で16回出場）の4県では3/4以上の大会で「甲子園常連組」が代表権を獲得している。この「甲子園常連組」に宗教色が濃い学校が海星・比叡山・P L学園・天理・智弁学園・智弁和歌山の6校も含まれており、P L学園・天理・智弁和歌山の3校が全国制覇を達成していることは特筆に値しよう。1997年の地方大会の参加校数が100を超える南北海道・東東京・神奈川の各地域で2校の、茨城・新潟・愛知・大阪に1校の、50校未満の地区では富山・和歌山・徳島で2校の、山梨・福井・滋賀・香川・高知・佐賀・宮崎で1校の「甲子園常連組」がある。

☆地域的特色

次の地区別に代表校の特色を見てみよう。多数の学校が代表校となっている地区は、

岩手・静岡の2地区の14校、北北海道・兵庫・長崎・宮崎地区の13校、埼玉・千葉・島根・山口の12校、茨城・茨木・福岡・佐賀・大分の11校となっており、逆に特定の学校以外では代表校となり難い地区は、奈良地区の3校、宮城・鹿児島地区の4校、石川、徳島地区の5校、山梨・高知地区の6校、山形・神奈川・富山・岡山・鳥取・愛媛地区の7校となっている。特に奈良地区では天理・智弁の両校で19回、宮城地域では仙台育英・東北の両校で18回であり、それ以外の学校が代表権を獲得することは奇跡的なものと思われる。また地域大会への参加校数が30未満の鳥取・福井両県を取ると、参加校数26の鳥取では「甲子園常連組」に属する学校は存在せず、7校が代表権を獲得している（代表校はすべて県立高校である）が、他方福井県では福井商業高校が「甲子園常連組」に名をつらね9回の出場をとげており、福井・敦賀気比の両校が3回、敦賀・北陸の両校が2回と大野高校が1回代表の座を射止めている。また福井・敦賀気比・北陸の3校は私立学校であり、これらの私立学校から8回代表権を獲得している。鳥取県と福井県という日本海沿岸の高校数の少ない地域での私立学校の存在がこのような姿を取っているものであろう。因みに北陸高校は浄土真宗系の、また敦賀気比は新しい型の（第三セクター方式）私立学校であることも付記しておきたい。

☆共学・男子校

この20年間に代表権を得た高校でも近年になって共学制を採用する学校も現れてきている（1995年に鹿児島実業高校は共学制を採用し、女子生徒を受け入れるようになった。）甲子園で公式試合を行うことのできた前身もしくは前身の一部が女学校もしくは高等女学校であったことを公式に表明している学校は27校ある。代表的なものを挙げるならば、北北海道の旭川大高校の前身は沢井女子裁縫学校であり、同地区の帯広北高校は渡辺女子高校、全国制覇を成し遂げた茨城県の取手二校は実科女学校を前身としているし、同県の土浦日大高校も土浦女子高校を母体としており、埼玉県浦和市立高校は市立高等女学校を、栃木県の黒磯高校は高等女学校を前身としている公立高校であり。西東京の堀越高校は堀越高等女学校、東東京の修徳高校も高等女学校を前身としているし、新潟県の中越高校は斎藤女学館が1956年に共学化し、男子生徒を受け入れたものであるし、大阪の府立渋谷高校は手芸女学校が発展的に改組されたものであり、大分の柳ヶ浦高校は、前身は柳ヶ浦裁縫女学校で、1966年に共学化に踏み切ったものである。逆に男子校は札幌商、函館大有斗、北海、北照、山形南、東北、宇都宮学園、秀明、関東一、法政二、岐阜第一、海星（三重）、北陸大谷、宇治、東山、花園、平安、京都成章、北陽、上宮、履正社、報徳学園、滝川、神戸弘陵、村野工、高野山、山陽、広陵、南陽工、福岡大大濠、東福岡、海星（長崎）、九州学院、日向学院、樟南、鹿児島商の36校である。海星（三重・長崎）、九州学院、日向学院といったキリスト教系の学校や北陸大谷、東山、花園、平安、高野山といった仏教系の学校が含まれているのが注目される。

☆学科・学習コース

単なる普通科の課程ばかりではなく、学校の特色として職業科の課程を置いたり、総合学科や国際科・国際進学・国際留学など外国語の修得に重点を置く学科・コースを設置したり、情報化社会の到来に備えて情報機器の操作の習得に重きをおく教科に力を注ぐなどの学科編成や学習課程の編成に工夫を凝らしている学校が商業科の課程（88）や工業科の課程（56）や体育科もしくは体育コース（8）を含めて175校で行われており、大学への進学に備える特別進学コースの設置や中高一貫教育をうたい文句にしている学校も存在している。注目されるのは体育科や体育コース・スポーツコースを設置している学校が地方大会を勝ち抜き、甲子園でも活躍していることである。市立船橋高校が体育科を設置していることは有名であるが、大宮東（埼玉）にも体育科が設置されているし、その他にも体育コース・スポーツコースを設置しているのは、東海大四（北海道）、拓大紅陵（千葉）、北陸大谷（石川）、如水館（広島）、西京（山口）、沖縄尚南である。商業高校や商業科を設置している「総合制」高校では情報処理が、また和歌山工業ではパソコン実習必修が強調されていることは興味深い。商業科での情報処理と工業科でのパソコン実習必修という文言上の差異は学科の性質を強調するためのものなのだろうか。ユニークなものとしては特定の教科の必修を強調することで学校の特色を表明しようとする試みである。國學院栃木の男子には柔道と剣道の、女子にはなぎなたの必修をうたうことで学校の特色が出せると考えてのことであろうか。学科・教科目ではないが、学校の特色として「自由の雰囲気」を強調しようとするのであろうが、“私服通学の認可”を敢えて唱えている高校があることも興味深い。1874年に創設された秋田高校であるが、厳しすぎる「校則」への反発と生徒の自治・自律を表明するものとして目を引き付けるものがある。

☆創設年代

この20年間に甲子園への切符を手に入れた441校の設立年について考察してみたい。これらの代表校のうちで創設年の明確になっている369校の内訳は①1900年までに設立された学校 69校、②1901年から1925年までに設立された学校 117校、③1926年から1944年までに設立された学校 39校、④1945年から1960年までに設立された学校 54校、⑤1961年から1977年までに設立された学校 60校、⑥1978年以降に設立された学校 30校となっている。最も設立年の古い学校は1872年に設立された新潟県の長岡高校と京都府の花園であり、葦山、比叡山、平安、鳥取西が翌1873年に設立されており、1874年には秋田と立教の前身校が設立されている。次いで宇和島東、明野、桐蔭、北陸、浜田、徳山が設立されているが、旧藩校や僧職養成機関を改組したり、キリスト教布教のための学校を設立したものであったが、しばらくすると1882年設立の横浜商業をはじめとする商業学校が設立され（例えば樟南 ≡旧鹿児島商工）・下関商・長崎商・八幡商などの商

業高校の前身である商業学校が大都市・商業都市を中心に陸続と設立される)、また自由民権運動の活発化により学法石川の前身の「石川義塾」ような「〇〇義塾」が民権運動の中で誕生し、さらに工業化の促進のために足利工、伊勢工、米沢工などが設立されていく。興味深いのは1876年に設立された宇和島東高校の前身は“南予変則学校”であり、1896年設立の「正則学園」と好対照をなしている。「正則」教育とは、外国の知識を耳目双方を通じて教育するものであり、外国人教師による外国語の講義を受講し、外国語によるコミュニケーションも可能になる教育を施すものであったが、「変則」教育とは、外国語の文章を理解することに重点を置き、外国の知識の習得に重きをおくもので、外国人の外国語による講義はあったとしても通訳付きであった。「正則学園」の開設よりも先に“南予変則学校”が設立されていることは、外国の知識を習得・紹介する知識人の育成を急ぐために、漢文の習後に倣った方法を欧米の言語についても発音・聞き取り・会話がおろそかにされ、そのことが「旧制中等学校」の外国語教育の基調となってしまったのである。引き続き女子の中等教育が生み出される。1901年設立の桐生第一の前身の「桐生裁縫専門女学校」や1911年設立の柳ヶ浦の前身の「柳ヶ浦裁縫女学校」や同年に設立された諫早の前身校である「女学校」などは未婚の優良な労働力として一定の技芸を身につけた女性の育成と良妻賢母の育成を目指しての教育を行うのである。次の流れとして勤労青少年のための中等教育機関として夜間学校が誕生してくる。1921年に設立された「新潟明訓」(漫画「ドカベン」の母校としても有名になったが)や1938年に創設された一関商工は私立の夜間中学として産声を挙げたのである。第二次世界大戦を挟んで中等教育の様相は一変する。義務制の学校として新制中学校が誕生し、これまでの中等教育機関は、民主的な後期中等教育機関として再編されることになっていく。先に触れたように「高校四原則」と呼ばれる後期中等教育再編の方向性が打ち出され、公立の高校はおしなべて「(男女)共学」「学区制」「総合制」「定時制との一体的運営」の方向で再編された。旧制中学・旧制高等女学校・地域の商業学校をはじめとする職業学校が統合されて地域の青年の教育機関として新制「高校」が誕生したのである。1951年の「産業教育振興法」と政令改正諮問委員会の「教育制度に関する答申」によって高校四原則の「総合制」は崩壊に向けて進み始め、地域の青年のための教育機関の性質も色づく以前に立ち枯れそうになりつつあった。当該年齢の青年数の増加と進学率の上昇により多数の高校が誕生したが、公立高校の場合は概ね「新設校」として二流校の域を出ることはできなかった。また私立高校の場合では、安定した経営と充実した教育を実現するために、特色を持たねばならず、「経営基盤」の脆弱な学校は第一次ベビーブーマーの時期の終結を前に経営規模を拡大した日大・東海大などの系列下に入り、そこで活路を模索するのである。1963年の経済審議会答申の「経済発展における人的能力開発の課程と対策」などによる「人的資源論」に基づいて高校教育の多様化が促進され、優良な技能者

の育成機関としての高校が強調され、経済界の求める多様な技能をもった労働者の育成のために、新しい学科の設置が強引に推進された。次いで第二次ベビーブーマーの高校への到来を前後して、私学では公立学校では為し得ない中高一貫教育を進める方向が私学では試行され、人間形式や（大学）受験への優位さを強調する方向が顕著になるとともに、公立の新設高を中心に多様な教育課程を設置する学校の数が増えてきている。この一般的な傾向が甲子園出場ということが一つの高校教育の成果として位置づけられ、スポーツの奨励も学校の特性として評価されるのである。「高校四原則」の崩壊以降の学校の特徴としては先に述べた教育課程・教育コースの多様化であり、大規模大学の系列下に入ることであり、秀明（埼玉）のように「中高一貫教育」や江戸川学園（茨城）・常総学院（茨城）・浦和学院（埼玉）・京都成章のように野球に力を注いで人格形成にも、生徒の安定的確保と就職先の開拓に一役立たせることもあるのである。名監督を招聘し、中学校の大会で活躍した者に入学を働きかけ、立派な野球関連施設の充実を図ることにより、学校創設後ほどなくして甲子園への代表権を上記の学校は手中におさめたのである。

☆宗教との関連

甲子園出場校の校名には旭川龍谷、北陸大谷、豊田大谷、光星学院、海星などと宗教色を明確に示しているものもあればそうでないものもある。この20年間の代表校で学校紹介から宗教色が窺える学校は、以下のものである。旭川龍谷（浄土真宗本願寺派系）、駒大岩見沢（仏教 禅宗系）、光星学院（カトリック系）、盛岡大付属（キリスト教系）、立教（プロテスタント系）、成田（成田山新勝寺）、創価（創価学会）、藤嶺藤沢（時宗系）、山梨学院（プロテスタント系）、愛知（曹洞宗系）、豊田大谷（浄土真宗大谷派系）、岐阜南（浄土真宗本願寺派系）、海星（三重・長崎ともにカトリック系）、北陸大谷（浄土真宗大谷派系）、北陸（浄土真宗本願寺派系）、比叡山（天台宗）、近江兄弟社（キリスト教プロテスタント系）、東山（浄土宗知恩院派）、花園（臨済宗妙心寺派）、平安（浄土真宗本願寺派）、PL学園（PL教）、上宮（浄土宗知恩院派系）、天理（天理教）、智弁学園（弁天宗）、智弁和歌山（弁天宗）、高野山（古義真言宗）、佐賀龍谷（浄土真宗本願寺派系）、長崎南山（カトリック系）、鎮西（仏教系）、九州学院（プロテスタント系）、日向学院（カトリック系）である。教育理念の基盤に教育を置くことは私学の一つのあり方であり、宗教の教義のみならず、教育方針全般に、また生活指導方針に宗教の理念を位置づけようとすることはそれなりに有効であろう。球場での攻守の対決の場面に「祈り」の姿勢や「御守り」を身につける態度は頂けないが。

☆ドラフト

選手権大会に出場し、活躍した名選手・好選手が、プロ野球の世界から注目を浴びることは理の当然である。この20年間にドラフト会議で指名された高校生で、直ぐにプロ

全国高校野球選手権大会の教育学

表 8 ドラフト一覧表

年	読 売 1	読 売 2	読 売 3
1978	棄権	棄権	
1979	岡崎郁 (大分商) 3		
1980	駒田徳広 (桜井商) 2		
1981	槇原寛己 (大府) 1	吉村禎章 (P L) 3	村田真一 (滝川) 5
1982	齋藤雅樹 (市川口) 1	川相昌弘 (岡山南) 4	
1983	水野雄仁 (池田) 1	香田勲男 (佐世保工) 2	
1984	井上真二 (熊本工) 5		
1985	桑田真澄 (P L) 1		
1986	木田優夫 (日大明誠) 1	緒方耕一 (熊本工) 6	
1987	後藤孝次 (中京) 2	杉山直樹 (沼津学園) 6	
1988			
1989			
1990			
1991			
1992	松井秀輝 (星稜) 1		
1993	岡島秀樹 (東山) 3		
1994			
1995			
1996			

年	ヤクルト 1	ヤクルト 2	横 浜 1
1978			
1979			
1980			
1981	荒木大輔 (早実) 1		
1982	池山隆寛 (市尼) 2	橋上秀樹 (安田学園)	大門和彦 (東宇治) 4
1983	乱橋幸仁 (旭川大) 6		
1984			中山裕章 (高知商) 1
1985	土橋勝征 (印旛) 2	飯田哲也 (拓大紅陵) 4	
1986	鈴木平 (東海大一) 3	城友博 (習志野) 6	盛田幸妃 (函館有斗) 1
1987	川崎憲次郎 (津久見) 1		谷繁元信 (江の川) 1
1988			
1989			鈴木尚典 (横浜) 4
1990	石井一久 (東京学館浦安) 1		三浦大輔 (高田商) 6
1991			
1992			
1993			
1994			
1995			
1996			

全国高校野球選手権大会の教育学

表 8 ドラフト一覧表

年	横浜 2	中日 1	中日 2
1978			
1979		牛島和彦 (浪商) 1	
1980			
1981			
1982		彦野利勝 (愛知) 5	
1983		藤王康晴 (享栄) 1	山本昌広 (日大藤沢)
1984		中村武志 (花園) 1	
1985		前原博之 (県岐商) 5	
1986		近藤真一 (享栄) 1	山崎武司 (愛工大名電) 2
1987	野村弘 (PL) 3	立浪和義 (PL) 1	上原晃 (沖水) 3
1988		今中慎二 (大阪桐蔭) 1	山口幸司 (大宮東) 3
1989		山田喜久夫 (東邦) 5	種田仁 (上宮) 6
1990			
1991			
1992			
1993			
1994			
1995			
1996			

年	阪神 1	阪神 2	広島 1
1978			
1979			
1980			
1981			
1982	御子柴進 (松本工) 4		
1983	仲田幸司 (興南) 3		紀藤真琴 (中京)
1984			
1985			
1986			緒方孝市 (鳥栖) 3
1987	山田勝彦 (東邦) 3		
1988	中込伸 (神崎工) 1	鮎川義文 (星城) 6	
1989	新庄剛志 (西日本短大付) 5		前田智徳 (熊本工) 4
1990			
1991			
1992			
1993			
1994			
1995			
1996			

全国高校野球選手権大会の教育学

表 8 ドラフト一覧表

年	西 武 1	西 武 2	千 葉 1
1978			
1979			
1980			愛甲猛（横浜） 1
1981	工藤公康（名電工） 6		
1982	苫篠（上宮） 2		
1983	渡辺久信（前橋工） 1		
1984	大久保博元（水戸商） 1	田辺徳雄（吉田） 2	
1985	清原和博（PL） 1	横田久則（那賀） 6	
1986			
1987	鈴木健（浦和学院） 1		伊良部秀輝（尽誠学園） 1
1988			前田幸長（福岡第一） 1
1989			
1990			
1991			
1992			
1993	松井和夫（PL） 3		
1994			
1995			
1996			

年	千 葉 2	千 葉 3	ハ ム 1
1978			
1979			
1980	欠端光則（岩手福岡） 3		
1981			
1982			
1983			津野浩（高知商） 3
1984			
1985			田中幸雄（都城） 3
1986			
1987	堀幸一（長崎海星） 3	芝草宇宙（帝京） 6	
1988			
1989			
1990			
1991			上田佳範（松商学園） 1
1992			
1993			金子誠（常総学院） 3
1994			
1995			
1996			

全国高校野球選手権大会の教育学

表 8 ドラフト一覧表

年	近 鉄 1	近 鉄 2	神 戸 1
1978			石嶺和彦（豊見城） 2
1979			
1980			
1981			
1982	古久保健二（大成） 6	加藤哲郎（宮崎日大） 1	
1983	吉井理人（箕島） 2	村上隆行（大牟田） 3	星野伸之（旭川工） 5
1984			高橋智（神奈川向上） 4
1985	檜山泰浩（東筑） 1		
1986	中村良二（天理） 2	大村慎次（滝川二） 6	
1987			
1988	赤堀元之（静岡） 4		
1989			
1990			
1991			鈴木一郎（愛工大名電） 4
1992			
1993			平井正史（宇和島東） 1
1994			
1995			
1996			

年	福 岡 1	福 岡 2	福 岡 3
1978			
1979	香川伸行（浪商） 2		
1980			
1981			
1982			
1983	岸川勝也（佐賀北） 3		
1984	湯上谷宏（星陵） 2		
1985	広永益隆（徳島商） 3		
1986			
1987	大道典良（明野） 4	吉永幸一郎（東海大工） 5	村田勝善（星稜） 6
1988	村上誠一（熊本工） 4		
1989			
1990	村松有人（星稜） 6		
1991			
1992			
1993			
1994	城島健司（別府大付） 1		
1995			
1996			

全国高校野球選手権大会の教育学

表 8 ドラフト一覧表

年	備 考 1	備 考 2	備 考 3
1978	江川卓 (法大出) <阪神> 1	江川空白の一日事件	ヤ読広大中阪阪近ハロ西南
1979			広大中阪読ヤ近阪ハロ南西
1980			南阪西ハロ近中阪大読ヤ広
1981			近南西口阪ハ大中ヤ阪広読
1982			ヤ大広阪読中南口阪近ハ西
1983			ヤ中阪大広読口南近ハ阪西
1984			ハ南近西口阪大ヤ阪読中広
1985			南ハ阪近口西ヤ中大読広阪
1986			ヤ中大阪読広南ハロ阪近西
1987			阪大ヤ広中読近口南ハ阪西
1988			阪ヤ大広読中口ダオハ近西
1989	元木大介 (上宮) <ダ> 拒否		読広中ヤ阪大近オ西ダハロ
1990	元木大介 (上宮出) <読> 1		阪ヤ中大広読ダロハ近オ西
1991			阪大読ヤ中広ロダハオ近西
1992			中横広阪読ヤロハダオ近西
1993			ヤ中読阪横広西ハオ近ロダ
1994			読中広ヤ阪横西オ近ダロハ
1995	福留孝介 (P L) <近> 1 拒否		ヤ広読横中阪オロ西ハダ近
1996			読中広ヤ横阪オハ西近ダロ

* 選手名の後の数字は指名順位

** 備考 3 はその年の順位

野球の世界に入り、それなりの活躍を遂げている(既に引退をした選手も少なくないが)選手は、表 8 に示してある。この20年間に指名を受けてプロ入りし、一定の活躍をしている者(投手ではほぼ一年近くにわたってローテーション投手ないしは一回以上規定投球回数に達した者、野手では一年以上ほぼ規定打席に到達することのあった者、もしくは輝かしい記録を成し遂げた者=無安打無得点完投の近藤真一<亨栄一中日>)を年度別・球団別に挙げたものである。読売17人、ヤクルト10人、横浜7人、中日14人、阪神6人、広島3人、西武8人、千葉ロッテ6人、日本ハム4人、近鉄9人、神戸5人、福岡ダイエー10人の99人がこれに該当する。この中で選手権大会に選手として出場することのできた者は55人であり、その中には3年間の選手権大会にすべて出場することのできた桑田真澄(P L学園一読売)・清原和博(P L学園一西武一読売)・荒木大輔(早稲田実一ヤクルト一横浜)も含まれる。活躍中の高校生ドラフト指名選手の中では1994年指名の城島健司選手(福岡ダイエー)が最年少であり、現在横浜ベイスターズで活躍している読売指名の駒田徳広選手が最年長である。セントラル・リーグの読売・ヤクルト・中日、パシフィック・リーグの福岡ダイエー・西武・近鉄に指名された高校生が活躍しているのに対して、広島・日本ハム・オリックスに指名されて入団した選手で活躍しているものが比較的少ないのは球団としての人気・選手育成の方針によるところがあると考えられるし(毎年のようにストーブ・リーグを騒がせる読売が高卒選手の育成に成功していることは意外のことではあり、新人の育成に定評のある広島がドラフト指名選手の育成にそれほどの成果をおさめていないのとは好対照である)、意中の球団でなければ大学に進学したり、社会人野球に活躍の場を求めることが可能であるためでもある。(顕著な例として指名を拒否した高校生として江川・元木・福留の3選手の名を挙げて置きたい。)甲子園での選手権大会で喝采を浴び、ドラフト会議で指名を受けた選手であろうともプロ野球の世界で活躍できるのは極く少数で20年間で僅か50名余りの者しかレギュラーの地位を確保し、活躍しているに過ぎない。

☆在日朝鮮・韓国人問題など

1981年8月5日付の朝日新聞は「第63回全国高校野球選手権大会 甲子園に競う49代表」と題する記事でこの大会に出場する選手と責任教師および監督の一覧表を公表している。その一覧表の京都商の欄には左翼手の韓裕と中堅手の鄭昭相の二人の名が記されていた。同年8月7日の第63回全国高校野球選手権大会開会式の予行演習では、……京都商、北陽、報徳学園……の順で並んでいたが、報徳学園の三塁手高原広秀は、京都商の選手に向かって『韓って誰や』、『鄭って誰や』と話しかけ、『俺も韓国人や、報徳には三人いる。京商には何人いるんや』と声をかけたという。この時に、本名出場選手がいることで報徳学園の韓国籍選手は、京都商チームにも、京都商の朝鮮・韓国籍選手にも親しみを感じたという。報徳学園も、京都商も勝ち進み、奇しくも決勝戦で顔を合わせ

ることになった。この年の決勝戦は、近畿勢の対決、剛腕投手金村 vs 好投手井口の対決、逆転の報徳学園か接戦に強い京都商かというゲームとしての魅力で超満員の観衆を集めた。同時に、このゲームは報徳学園には3名、京都商には4名の朝鮮人・韓国人選手が登録されており、その中には韓・鄭という2名の本名出場選手がいることにも注目が寄せられた。ゲームは金村の投打にわたる活躍で報徳学園が2-0で全国制覇の栄誉を獲得した。

京都商には韓裕、鄭昭相の他に右翼手の金原貴義(本名 金貴義)、控えの内野手で甲子園で華麗な守備を見せた呉本治勇(本名 呉治勇)の四選手、報徳学園には投手で4番を打った金村義明(本名 金義明)、三塁手の高原広秀(本名 高広秀)、中堅手の岡部道明(朝鮮名 曹道明、岡部の国籍は日本だが父親は韓国人、彼の両親は彼らの特に母親の両親の反対のために内縁関係の夫婦である)の三選手がいた。

これらの朝鮮・韓国籍選手が甲子園で大活躍した第63回全国高等学校野球大会であったが、この大会の終了後、日本高等学校野球連盟は韓国へ派遣する日本高校野球選抜チームを発表した。監督は報徳学園の北原功嗣、16人の選手には報徳学園から金村義明、石田健、大谷晴重、高原広秀、西原晴昭の5選手が、京都商から井口和人、水本啓史、鄭昭相の3選手が選ばれた。甲子園で大活躍をした岡部は選に洩れたが、補欠として選ばれ日本高校野球選抜チームのメンバーに加わった。

またこの年に改正された国体の出場選手に関する規定の改正で、外国籍の選手も国民体育大会に出場できることになった。後に国民栄誉賞を受けた早稲田実業の王貞治選手、母校静岡商を準優勝に導いたエースの新浦寿夫(本名 金日融)も、この「国籍条項」のためにチームが国体に出場しながらも、国体の秋季大会には出場できず、無念の涙を流したのである。1981年のびわこ国体秋季大会に出場することになった、報徳学園と京都商は、たまたま同じ宿舎に泊まることになった。毎晩朝鮮・韓国人選手たちはお互いの部屋を訪問し、夜遅くまで談笑したといい、その後も毎年7人で「新年会」を行い、旧交をあたためているという。父親の教育方針もあり、幼稚園の時から韓と名乗り、野球をすることと同様本名を名乗ることが自然だと受けとめている韓、鄭が本名なら鄭を名乗ればいいと、小学校3年の時にテストに鄭昭相と書いて提出し、通名の加藤を投げ捨てた鄭、姉と妹が民族学校に通い、日常会話なら母国語で話せる金村、中学校までは呉を名乗っていた呉本、……どの選手も「民族意識」が希薄とはいえない。人間として堂々と生きていくことが、大事なのだとの確信と、甲子園出場を目指して流した汗が力が彼らにとってかけがえのない財産となっている。

ドラマチックな「本名宣言」はしなくとも、家族やチーム・メイト・教師や監督という優れた指導者に恵まれて、「差別」を克服し、本名で日本中の耳目の注視の中で本名で出場した選手が誕生したことは、「歴史的」な意味をもつものである。他方、甲子園で本

塁打を打つなど大活躍をした岡部選手を日本高校野球選抜チームの一員に最初から加えなかった日本高校野球連盟の姿勢には「民族差別」を克服し得ないものが窺える。(残念なことに、日本のプロ野球で輝かしい記録を樹立した、藤本英雄＝本名 季八竜、金田正一＝本名 金慶弘、張本勲＝本名 張勲などの名選手でさえも、民族差別の強いこの国にあっては通名を使用していたのである。)

☆選手宣誓と入場式の演出

選抜大会にしる、選手権大会にしる、新聞社が主催する一大興業である。世人が耳目を傾けるイベントとして、それなりの演出がなされている。郷里の懐かしさに出会いに甲子園へと足を運ぶ成人たちは甲子園という「祭り」の舞台に近づこうとする群衆の一員である。舞台には、演じられるものを介して「郷里」が存在する。「郷里」を味わうために、「郷里」への哀愁を感じながら、群衆は群れるのである。野球がプレイされるのを見るばかりでなく、肌で「郷里」を感じるために在阪の、いや関西在住の「郷里」を忘れ難い群衆が演者となって、もう一つの舞台を象っている。この二つの舞台を華やかにするための「演出」として、青春が、若人の情熱が強調される。大きな演出として、入場式・入場行進が位置づけられ、選手も「自己」の主張をプレイのみならず、言語によっても行う。大会本部が定める文言ではなく、自分の、自分達「選手」の主張を「宣誓」に託して行うようになっている。この舞台を支えるために地元兵庫県の高校生が入場行進の進行役をつとめる。「青春」を強調するに余りあるこうした「演出」が甲子園を「郷里」に出会う場所として檜舞台としてしまうのである。ブラスバンドも行進の司会も「大会歌」の合唱もほんの小さな小道具にしか過ぎない。演じられているのは何かの「郷里」を求めるすがたであり、それはそのまま理想の桃源郷となってしまふのであろう。ほんのささいな演出ではあるが、そこには「青春」の虚構が演ぜられ、その場に居合わせるという存在感が、より大きな舞台となっているのではなかろうか。

マスは引き続きドラマへのイントロとして心地よい響きを肌で感じているのではなかろうか。「甲子園」に向けての汗が、甲子園での汗になって、共に味わえるおおきな広がりがあるこそ、80回にも及ぶ演ぜられたイベントが継承されてきたのではなかろうか。たかが「野球」、されど「野球」なのである。

(4)

1915年の7月1日「朝日新聞」に掲載された社告は「全国中等学校野球大会」の開催趣旨について次のように述べている。

野球技の一度我国に來りてより未だ幾何ならざるに今日の如き隆盛を觀るに至れるは同技の男性的にして而も其の興味と其の技術とが著しく我国国民性と一致せるに依るものなるべし、ことに中学程度の学生間に最も普く行はれつゝありて、東海五県大会 関西大会等を始めとし各地に其の連合大会の拳を見ざるなきに至れり、然も未だ全国

全国高校野球選手権大会の教育学

の代表的健児が一場に会して潑刺たる妙技を競ふ全国大会の催しあるを見ず、本社は之を遺憾とし茲に左記の条件により夏期休暇中の八月中旬をトし全国各地方の中等学校中よりその代表野球団、即ち各地方を代表せりと認むべき野球大会に於ける最優勝校を大阪に聘し豊中グラウンドに於て全国中等学校野球大会を行ひ以て其選手権を争はしめんとす

- 一 参加校の資格は其の地方を代表せる各府県連合大会に於ける優勝校たる事
- 一 優勝校は本年大会に於て優勝権を得たるものたる事
- 一 選手の往復汽車賃又は汽船賃は主催者に於て負担する事

と、全国中等学校野球大会の開催を布告し、野球の隆盛が男性的でその興味とその技術が「我國民性と一致」するところにあるとして、中等学校野球大会を通じて「國民性に一致する野球」を形成していこうとしたのであり、この大会組織化に功績のあった大阪朝日新聞社員中尾濟は「本大会の試合は職業化せる米國野球の直訳ではなくて、武士道精神を基調とする日本の野球」であると端的に語っていたのである。「武士道野球」を追求しようとする流れは、勝負を重視し、大会規則により選手やチームの行動も細かく定められ、武士道にふさわしいものとして構成され、武士道的儀礼が強調され、「礼に始まり、礼に終わる」という作法が形成され、武士道にふさわしい試合形式としてトーナメント方式が採用され、「試合中団体の為にはサクリファイをやり全団体の為を因るは少にしては義侠、犠牲的精神を養ひ、大にしては尽忠報國等の愛國的大精神の淵源となる」と主張され、自己を棄てた「犠牲的精神」の發揮・養成こそ野球の真髓と称揚され、全国優勝野球大会はそうした「犠牲的精神」を顕彰し広く國民全体にまで普及させる場とされたのである。國民全体をして「尽忠報國等の愛國的大精神の淵源」たらしめる「犠牲的精神」の顕彰の場としての中等学校野球大会の隆盛が模索されるのであり、他方でフェアプレイの訳語としての「技術・体力では劣っていても正々堂々と相手と対戦し、自己の力を遺憾なく發揮する」「敢闘精神」が賛美され、「野球の根本目的は勝敗の如何にあらずして飽迄青年らしく学生らしく立派に上品に正当なる手段の下に所謂ベストを尽くして技を楽しめば事足れりで何も勝敗の二字に全然拘泥したり執着する必要は無いと信ずる」とされて、「犠牲的精神」と「敢闘精神」が強調されるのである。すなわち、チームのために自己を犠牲にして、チームに勝利に「敢闘」する選手は「日本魂」の精華を體現し、國家に忠良な臣民の理念的モデルとなり、また敢闘精神を賞賛するものの、トーナメント形式を採用する試合形態から優勝劣敗の世界の縮図として位置づけられるのである。野球というスポーツを単なる戯れではなく、世界の縮図を體現し、優勝劣敗の世界を勝ち抜くために「犠牲的精神」を發揮し、「敢闘精神」に富む臣民の理念的モデルとして野球の全国大会が構想され、發展させられてきたのである。隆盛を迎えていた全国中等学校野球選手権大会も1941年7月12日には、一部の地域で予選が開始されてい

た中で、何の予告もなしに中止になってしまった。これは7月中旬にだされた「スポーツの全国大会の禁止」という文部次官通達に基づくものであるが、その背景にこの年に関東軍が実施した大規模な演習（＝関東軍特種演習）があり、それにより国内交通機関が兵員と物資の輸送で輻輳し、不要不急の人員や物品の移動を制限したためであるとされている。しかも防諜上、新聞報道は禁止とされたので、主催者の朝日新聞社は各地方中等野球連盟に中止を連絡した。この暗黙裡の中止は1946年の再開まで中断されるのである。

再開された全国中等学校野球大会は、回数も継承され、大会規定もほぼ踏襲された。大きな違いは、新聞社の主催する野球大会から、高等学校野球連盟との共催になったことである。戦前の大会において強調された、犠牲精神、敢闘精神、精神主義的傾向も理念として継承されている。学生のスポーツということから学校な一部の生徒の不祥事が明るみになると出場を辞退させるという「教育的配慮」の押し付けも依然として続いている。学校の名誉としての代表権の獲得が大会の權威の維持の役立つとされているのである。

野球とベースボールの比較文化論も数多く見られる。スポーツは飽くまで個人の、もしくはスポーツを楽しむ集団のものでなければならない。異常なほどの野球部予算や野球以外には使われることがほとんどない野球場の数の多さは高校野球のためであるときえ思われる。本塁打による劇的な逆転があるスポーツであるが故に、また文化的背景を異にする国民の統合に役立ち、力と力で対決する一球一打に心をときめかす攻守にわたって攻撃的なアメリカのベースボールの姿を学びとる時に、個人主義を基軸としながら所属集団に対する献身へと脱皮しうるためには、学校スポーツの全面的改組が必要となるであろう。残念ながらJリーグに代表される新しいスポーツの流れの中には、地域スポーツの振興というほのかな光明がうかがえる。

主要参考文献

- 朝日新聞社『全国高等学校野球選手権大会70年史』
江刺正吾・小椋 博『高校野球の社会学』
有山輝雄『甲子園野球と日本人』
金 賛汀『甲子園の異邦人』
朝日新聞社『週刊朝日 '78甲子園』
⋮
朝日新聞社『週刊朝日 '97甲子園』

※ 本稿執筆後、柿沼昌芳、永野恒雄緒著『学校という〈病い〉』が刊行され、高校野球についての鋭い分析がなされている。甲子園への出場が非行の発覚により、連帯責任で辞退を要求されたり、部活動予算が異常に多額であるということを確認に描き出している。